

はてなの遠い世界へ

——マーヤの変身譚

久保はてな

あらすじ——省略

この作品は「あらすじ」を書かないことにしました。

その分ちょっと解説を。

Y高文芸部、2学年最後の課題は「花びらカマキリのビデオを参考に変身譚をつくる」こと。

久保はてなの作品は「はてなの遠い世界へ——マーヤの変身譚」。

相変わらずの長文となりましたが、理由があります。

それは久保はてな君といとこ「のん子」や家族との関係を描いた、1年夏の『透明な叫び』。そして、マーヤとの交流を描いた、2年夏の続編『はてなのヒロシマ』。

これを一部、二部とするなら、「三部作の最終作として書き上げた」作品です。

同時に「変身譚—花びらカマキリ」の課題にも応えています。

物語は全9節。1～3はこれまでの流れを受けた「はてなの私小説」風作品。

4から本格的な変身譚が開始されます。そこはSF作品であり、ゲーム系冒険小説であり、謎解きの推理小説風にもなっています。

よって、課題に応えた部分は第4節以降なので、読者は1～3を省略か、さーっと読まれて結構です。[ここは「なにっ？」とつぶやいてほしいところ(^.^)]

ただ、3節までに多くの伏線をちりばめています。

これに気付くのは相当難しいと思います。挑戦してみようと思う方はじっくりお読みください。【これぞ一読法実践！】

以下各節と頁番号を掲載します。

[1]	02	[2]	05	[3]	11
[4]	18	[5]	24	[6]	29
[7]	37	[8]	44	[9]	52

はてなの遠い世界へ——マーヤの変身譚

久保はてな

一九九九年一月三十一日が近づいている。あと二ヶ月。もう時間がない……。

[1]

十一月初め、ぼく、久保はてなはやっとマーヤとの二人っきりのデートを果たした。

九月の文化祭を終え、十月初めにぼくらY高校二学年は北海道四泊五日の修学旅行に出発した。今文芸部員は二年生十一名しかいない。

だから、ぼくとマーヤ（ぼくらは綾部摩耶さんのことをマーヤと呼んでいる）はもちろん文芸部員全員が修学旅行に参加したことになる。

ぼくとマーヤは別のクラスだし、班別自主行動が多いので、見かけることがあっても二人だけになることはほぼない。

ところが、修学旅行中ぼくは全く偶然にマーヤと三度出会った。函館のトラピスチヌ修道院、夜景の函館山、富良野Pホテルの日の出——それはまるで誰かの創作のようだった。

ぼくがひそかに思っているマーヤと、約束したわけでもないのに、そんなにたまたま会えるだろうか。ぼくはその偶然を何かしら運命的なもののように感じた。

旅行後文芸部顧問の堺羽根先生は予想通り「修学旅行を描く」課題を出してきた。ぼくはマーヤとの出会いを「北海道、それは美香の後ろ姿」と題してほぼそのまま小説に書いて提出した。

この合評は十月下旬の中間試験後に行われた。それ以来ぼくとマーヤはまた少し気まずい関係になってしまった。

ぼくとマーヤの偶然の出会いは当然二人しか知らない。特に三度目の富良野Pホテルのことは彼女でさえ知らないひそかな出会いだった。相手もマーヤではなく架空の「美香」に変えた。だから、マーヤさえ黙っていれば、ぼくの作品は単なるフィクションとして扱われるはず。少なくともぼくはそう思った。

ところが、部員連中はすぐにそれがぼくとマーヤを描いたものだと思抜いた。そして、当のマーヤも作中の女の子は自分だと明かしてしまったのだ。

他部員が口にした「ストーカーじゃん」という批判に答えるかのように、マーヤは「いちいの木の陰から跳ねるように出てくる妖精みたいな女って何だヨ、誰

だヨ？」とか、「富良野の朝の日の出を一人見るなんて一体どういう女なんだよ」と、やや自虐的に言い放ち、最後に「そうだよ。それはオレだよ！」と叫んだ。

マーヤは頬を染めていた。ぼくも真っ赤になった。ぼくは作品を合評に出さなければ良かったと後悔した。少なくともマーヤに先に見せ、公表していいか聞くべきだった。しかし、もう「後の祭り」ってやつだ。

かくしてぼくとマーヤはまた少し気まずい関係になったというわけだ。

でも、マーヤにしてみれば、合評の場ではああ言う態度を取るしかなかったのだと思う。彼女の内心はあんな風に描かれたことへの嬉しさ（たぶんあると思う）と、恥ずかしさ（そして迷惑？）の入り交じった複雑な気持ちが渦巻いていたのだ。

ただ、その日のぼくは妙に冷静だった。みんなの批評を聞きながら、なぜかぼくの目は彼女の両手のマニキュアに向いていた。

マニキュアをしたマーヤは初めて見た。左の爪は黒く塗られ、右の爪はどぎつい茶色だった。コギャルお決まりの原色マニキュアっていうのか。それは美しさのかけらも感じられない爪と手だと思った。

なぜマーヤはそんなマニキュアをするようになったのか。そう思ってぼくはマーヤに対してちょっと失望を感じていた。

その後ワープロ室でマーヤと顔を合わせると、どうもマーヤは視線を逸らせるような気がした。逆にぼくはちらちらマーヤが気になって仕方がない。ぼくの彼女への思いは失望のあるなしに関わらず、一層強くなっていた。ぼくはマーヤとの関係をじっくりしたものにしたかった。

ぼくの小説はマーヤを傷つけたかもしれない。ぼくは何とかして小説のことを謝りたいと思った。それもみんながいる所じゃなく、二人だけで会って謝りたいと。

マーヤが果たしてぼくの誘いに応じてくれるか。以前の自分だったら、とても口に出せなかった。しかし、堺羽根先生同伴とは言え、夏休みに一泊二日で一緒に広島へ行った一件がある。ぼくはマーヤが誘いを断らないだろうと、何となく感じていた。だが、臆病な自分にとってそれはいつでも一つの賭けだ。断られたら仕方がない。そう思いながらぼくはしばらくチャンスを待った。

十一月に入ってひんやりする気候が続いた。放課後のワープロ室も冷たい風が吹き込んで肌寒くなった。窓の外の樺や銀杏はそろそろ色づき始めている。Y高近辺もだんだん秋が深まっていた。

その日ワープロ室にはぼくとマーヤ、それに部長の遠井崇子と男子部員のカム・エー・オン（いずれもペンネーム）がいた。

修学旅行の合評終了後堺羽根先生はフロッピーを返却していつものように誤字脱字を直しておくよう指示を出した。さらに夏休みに使ったフロッピーを渡して次回課題を発表した。

次の課題は夏休み中にみんなで製作した連作小説（部員全員でリレーして小説を書いた）を、各自自分の作品として仕上げることだ。締め切りが二週間後に迫っていたので、みんなその打ち込みに追われていた。

遠井とカムがマイコン部の方へ遠征に出かけたとき、ぼくは今だと思ってマーヤのそばに行った。

「ね、マーヤ。横浜の人形館で知ってる？」

ぼくは内心ドキドキした。マーヤが何て答えるか、冷たい眼差しを向けるんじゃないか。そんな不安が胸をよぎっていた。

マーヤはゆっくり首を回して上目遣いにぼくを見た。別に温かくも冷たくもない、いつものマーヤの視線だ。ただ、一瞬瞳の奥が青く光ったような気がした。コンタクトのせいだろうか。

「ううん、知らない。何なの、それ？」

「世界中のいろいろな人形が展示されてるそうなんだ。マーヤは前に人形集めるのが趣味って言ってたじゃない。もし行ったことないんだったら、来週の土曜学校休みだから行ってみないかな、と思って」

「そんなこと言ったっけ？ 最近は人形集めなんかしてないけど……二人で行くの？」

ぼくはまたどきりときた。でも、勇気を奮い起こした。

「うん、二人だけで……嫌だったらいいけど」

マーヤはちょっと考えるそぶりを見せて言った。

「いいよ。来週の土曜は何も予定入っていないから。でも、それってホントは君が人形を見に行きたいんじゃないの？」

ぼくはどきまぎした。妙なことを言うと思った。

「いや、うん。それも少しはあるかな。じゃあ待ち合わせ場所なんかは後日また決めよう」

ぼくはマーヤのそばを離れた。遠井らが戻って来なかったのでほっとした。

ぼくがマーヤに思いを寄せているってことはこの間の合評でかなり公になってしまった。しかし、誰もぼくらが「両思い」だと思っていない。

遠井なんかは「はてなの片思いだろ」とはっきり言ってる。今まではぼくもそう思ったし、当分それでいいやとのんびりしていた。

ところが、最近文芸部の男連中にどうもマーヤへの意識がちらちら見え隠れしてぼくはちょっと焦り気味だった。

ぼくの穿ちすぎかもしれないけど、男子部員が書く小説の登場人物がマーヤに似ていると感じることがある。一番はっきり感じるのはネーミングだ。

マーヤは「綾部摩耶」と言う。彼らは登場人物に「矢部あやめ」とか「間宮八重」などとつけている。ローマ字に分解してみると、微妙に似ていてこいつマーヤのことを意識しているんじゃないかと思うほどだ。

部長の遠井崇子（あ、これはペンネームで実際は男だ）も、最近そんな感じの

ネーミングをしていた。もっとも本人に聞いたわけじゃないから、ホントのところはわからない。

ぼくは自分の席に戻るとパソコンの画面に目を走らせた。今度こそ本当にマーヤと二人だけのデートができる、そう思って心は上の空だった。

きっと仲直りの機会にもなる。いや、今日の感じだとあの作品でマーヤと気まぐれになったと思ったのはぼくだけで、マーヤはもしかしたら気にしていないのかもしれない。またぼくの独り相撲だった可能性がある。

こういうのを「忸怩たる思い」と言うんだろうか。でも、いい。他の男連中より一歩先んじたことは間違いないから。

その後ワープロ室は部員がぞろぞろ集合してみんなばちばちキーボードを打ち始めた。

[2]

翌週の土曜日、ぼくとマーヤは十時過ぎに横浜の関内駅で待ち合わせた。からっとした秋晴れだった。

マーヤはいつものように黒のロングスカート。そして、上はタートルネックの真っ赤なセーターだから一瞬ドキとした。

私服のマーヤは学校と違って大人びた雰囲気がある。ぼくは白のシャツと紺のズボン。結局制服のようで我ながら情けなかった。

でも、マーヤは会うと手をあげて微笑んだ。ぼくも笑みで答えた。今日のマーヤはマニキュウをしていなかった。しかし、髪の毛は薄い茶髪だった。ぼくはあれっと思ったけれど何も言わなかった。

それからぼくらは歩いて山下公園に向かった。以前はぎこちなさを意識してぎくしゃくしたのに、今日は感じない。ぼくらは歩きながら学校のこととか、文芸部の課題のことを語った。マーヤはよく喋ったしよく笑った。

山下公園に着くと、岸壁の氷川丸を眺めた。真っ青な空と濃緑色の海面。そして鮮やかな白い帆船。見学の客がぞろぞろ乗船する。ぼくらの目的地は人形館だから眺めるだけ。ぼくは地図で人形館の場所を確認していた。

暫く岸壁に佇んだ後人形館に向かってまた歩き始めた。途中こんもりとした林の中で、何人ものアベックがベンチにいる所に出た。みんな無言でまるで抱き合うかのように座って見つめ合っている。ぼくは顔が真っ赤になった。マーヤも頬を染めた。ぼくらは走るようにしてそこを離れた。

それからやっと人形館の入り口に着いた。マーヤが「ああびっくりした」と言った。ぼくも「すごいね。さすが横浜だ」と応じた。

人形館には一時間ほどいた。四階建てでホントに世界中の人形が飾られていた。

素材は布や絹から竹や木、そして磁器に陶器。大きさも大から小まで様々だった。

見物客は結構多かった。マーヤはかわいいとかきれいとか歓声を上げながら熱心に見ていた。ぼくは人形よりもちらちらとマーヤの横顔を盗み見るのが多かった。

薄く化粧をしているのか、唇が学校より赤い気がする。ふっくらとした頬のラインは日本人形より美しいと思った。髪の毛は茶髪より黒の方がいいなと思った。

ぼくらは二人で人形を眺めながら、いろいろ感想を述べ合った。うれしい感じがじわっと湧いてくる。淡い幸福感ってやつだ。しかし逆に、なんと言うことのない当たり前の感情にも支配されていた。やっと二人だけのデートができたというのに、ぼくの心はむしろ冷ややかだったかもしれない。少なくとも五月に強制デートでマーヤと歩いた時のような、舞い上がった感じはなかった。

人形館を出るときマーヤは「あの中にユーフォーキャッチャーの人形も入れたらいいのに」と言ってぼくを笑わせた。

「あれは芸術作品じゃないから無理でしょ」と言うと、マーヤは頬をふくらませた。やっぱりちょっと変わったところがある。

その後中華街に向かって歩き始めた。そろそろお昼だ。

ぼくは昼食にはラーメンとか中華粥がいいと思っていた。マーヤは「せっかく横浜に来たのだから、飲茶にしよう」と言う。

飲茶は高校生にとって高級だ。しかし、ランチ用の飲茶を探してみると、結構安い所があった。ぼくらはある中華レストランに入ってランチの飲茶と、飲み物として烏龍茶を注文した。

飲茶にしたのは正解だった。小皿にシューマイとかエビ餃子とか中華饅頭とかがきれいに並んで出てくる。マーヤはそのたびにおいしそうと歓声を上げた。実際とてもおいしかった。ぼくらは烏龍茶を飲みながら、眺めては食べまた眺めては食べる。七品か八品は来ただろう。

ぼくらはこのときも当たり障りのない雑談を交わした。芸能界のこと、アイドルのこと、ロックなどなど……。男の子と女の子なんてこんな時どんなことを喋っているのだろうと思った。

あまりにも他愛ない話ばかりでぼくは物足りなさを感じた。マーヤは時折笑いながらよく喋った。ぼくはまた少し失望感を覚えた。

学校ではどちらかと言うと寡黙なマーヤがこんなによく喋るとは意外だった。そして、マーヤは芸能界とかアイドル系の話が好きなんだろうかと思った。ぼくはもっと深い話がしたかった。だが、この場では話しづらかった。

飲茶のランチは一時間近くかかった。この後ぼくにはもう行くところがない。しかし、肝心の用事はまだ済ませていない。どこか誰もいないところでゆっくり話をしたい。外人墓地に行こうかと思った。ただ、あそこは山下公園以上にアベックが多いと聞いたことがある。

ぼくは仕方なく横浜球場に行ってみようかと言った。マーヤはいいよと答えた。

横浜球場の途中で何人かの浮浪者と出会った。ベンチに座ったり、地面に寝転がったりしている。S市ではほとんど見たことがない。何となく怖いような気がした。

横浜球場の中には入れなかった。球場をぐるりと一周すると、外野席の外側にベンチを見つけた。近くに人影はない。

ぼくは「休憩しよう」と言ってそこに腰を下ろした。マーヤも座った。

かなり歩いて汗ばんでいたのが冷たい風が心地よかった。これでやっと言いたいことが言える。ぼくの心臓はベンチを見つけたときからどきどき高鳴っていた。

「マーヤ……実は今日君を誘ったのは君に謝りたかったからなんだ」

ぼくは思い切って言った。

「謝る？ 何を？」 マーヤは訝しげに首をひねった。

「うん。この間の修学旅行の課題、覚えているよね。ぼくが書いたやつ。あんなものを書いて。しかも了承も取らずに発表して……悪かったと思う。それを謝りたかったんだ」

「ああ、あれ。『北海道、それは美香の後ろ姿』のことね。別にそんなことないよ。最初に読んだとき確かにびっくりした。トラピスチヌ修道院のところで、あ、これ自分だってすぐわかった。修学旅行中、はてなからあんなに後ろ姿ばかり見つめられてたなんて思いもしなかった。

みんなも言ってたようにちょっとストーカー的だったけど、あれってみんな偶然だったんでしょ。特に最後富良野のホテルの朝のことは私が外に出て日の出を見たのはたまたまだし、そのとき君が上の部屋から私を見かけたのもたまたまだしね。

でも、はてなが上から見ていたってちっとも気づかなかった。もっと大きな声で呼んでくれればよかったのに。私一人だけで富良野の日の出を見ていると思ってたから、逆にちょっと恥ずかしかった。でも、心配しないで。私ははてながストーカーじゃないってわかってるしね」

マーヤは微笑みながら言った。ぼくはほっとした。

「そう言ってくれると助かるよ。もちろん全て偶然の出会いだったんだ。でも、きっとマーヤは怒ってるだろうと思ってた」

「大丈夫。単なる小説じゃない。モデルにされたからっていちいち怒っていたら、文芸部員なんかやってられないわよ。それに、あれってのはてな独特の誇張表現でしょ」

「そうだよな……」

マーヤのあっさりした言葉でぼくはさらにほっとした。やはりマーヤはあの作品をそれほど気にしていなかったようだ。

しかし、安心すると同時にぼくは物足りなさを感じた。内心かすかに沸いてくる失望を隠せなかった。偶然だと言われ、単なる小説だし、誇張でしょと言われると、逆にマーヤはあの作品をそういう風に受け取っていたのか、とがっかりす

る気持ちは否定できない。

ぼくとしては修学旅行でマーヤとあんな風に出会えたこと、しかもそれが三度もあったこと、それを単なる偶然と考えたくなかった。むしろそれ以上の何かがある。そう思った。だからこそあれを作品化したし合評に発表した。マーヤへの思いがそれほど深いということを知っていてほしいと考えたからだ。ぼくはあの作品をマーヤだけが理解できる一つの告白と考えていた。ところが、マーヤはあれを単なる小説としか思わなかった……。

目の前の地面をかさこそと枯れ葉が転がってゆく。太陽が雲に隠れ、やや肌寒さが増していた。来たときは気づかなかったが、向こうの大屋根の下に浮浪者が一人眠っていた。まるで死んだかのようにぴくりとも動かない。ぼくは寂しい姿だと思った。

ぼくが黙り込んだのでマーヤが口を開いた。

「ところで、はてなは前に四人家族って言ってたけど、お祖父さんとかお祖母さんはもう亡くなったの？」

ぼくはもっと小説のことを話したかったけれど、質問に答えた。

「うん。お祖母ちゃんはぼくが生まれる前に亡くなったらしくて全く記憶にない。お祖父ちゃんはぼくが中学校二年の時に亡くなったんだ。一緒に暮らしていたわけじゃないけど、夏休み九州の田舎に行ったときはよく一緒に遊んでくれた。とても好きなお祖父ちゃんだった。

川で魚釣りをしたり、網打ちって言って川に網を打つと魚がどさっと取れるやつ。それに連れていってくれたり……河原で飯盒炊飯もやったりしたよ。楽しかったなあ。

それにぼくにとっては命の恩人でもあるんだ。ぼくは覚えていないけど、三歳頃川で溺れかけたぼくをお祖父ちゃんが救ってくれたんだ。春になったところで田舎近くの子どもたちだけで川遊びに行ったらしい。そのときぼくは誤って川に流された。川近くの家にお祖父ちゃんは子どもたちの騒ぐ声を聞き、慌てて走ってきた。そして、川に飛び込んでぼくを助けてくれた。水がまだ冷たいときで、お祖父ちゃんは風邪をひいていたそうだ」

「ふーん、そう。いいお祖父さんね。うちはお祖母ちゃんがいる。とてもやさしくて面白くて私ママの次に好き。でも、最近病気で入院がちだから心配なの。長生きしてほしいと思っているけど……お祖父さんが死んだ時ってどうだった？悲しかった？」

マーヤの顔が曇った。そうだったのかと思った。ぼくは遠くを見つめながら、そのときのことを思い出そうとした。

「今でも昨日のこことのようによく覚えているよ。お祖父ちゃんが死んだのは悲しかった。親戚や弔問客もいい人だったと涙ぐむ人が多かった。ぼくも涙を流した。母さんや兄貴も。ただ一番意外だったのは父さんだ。あんなに激しく泣く父さんを見たのは初めてだった。ぼくはもちろん床に横たわったお祖父ちゃんの姿を見

て涙を流した。でも、ぼくの泣き方と父さんの泣き方は全然違って……。

それで葬式の後父さんに聞いたんだ。どんなお祖父さんだったのって。父さんはしみじみといろいろ語ってくれた。やっぱり子どものときから父さんを連れて山歩きしたり、川遊びしたりしてとっても優しい人だったらしい。でも、厳しくて怖い父でもあったって……父さんの話の中でもっとも印象的なのが二つあった。

一つは父さんの大学時代。父さんは大学に五年行っただけ。本当は大学院に行きたかったって。祖父と話し合ったけれど、結局反対されて止めてしまった。でも、いい論文を書きたくて両親をだますようにして卒論を出さず、卒業を一年延期してしまったというんだ。

祖父や祖母は勘当だと仕送りをストップした。で、父さんは仕方なく、大学五年の春からバイトを始めた。身体があまり丈夫じゃなかったのが結構大変だったらしい。四、五、六月と、家具店の配送手伝いや、野球場の芝張りやらいろいろやって生活費を稼いだ。ところが、六月末これから就職活動ってときに、父さんは三ヶ月間バイトをして貯めた金を馬鹿なことで使い切ってしまった。でも、祖父らには一切泣き言を言わなかった。ただ、これから就職活動って言うのに生活費はない。会社訪問やら公務員試験へ行く交通費もない。やばいなあと思い始めたちょうどそのとき、祖父からの仕送りが再開されたんだって。甘いと言われるだろうが、あれはホントに助かったって父さんは言っていた」

「三ヶ月間貯めたお金を使い切った、馬鹿なことって何なの？」

マーヤは聞いた。目が笑っている。ぼくも笑いながら答えた。

「インベーダー・ゲームって知ってるかなあ。ぼくは復刻版で見たことあるけど。インベーダーがずんずん侵入してきてそれを打ち落とすやつ。最初期のテレビゲームで父さんはそれにのめりこんで有り金ぶっこんだそう。驚いちゃったよ。あの父さんにそんな一面があったなんて」

マーヤはからからと笑って「すごい」と言った。何がすごいかわからなかったけれど、ぼくも笑った。

「そして、もう一つは父さんがS市で就職して数年後のことだ。仕事の関係で九州に転勤できるようになったそう。祖父や祖母らはその気になっていろいろ準備したりした。息子が帰って来るんだからさぞ喜んだと思う。

なのに土壇場になって父さんは九州への転勤を断った。そして、そのことを祖父や祖母にうち明けづらくてなかなか話さなかった。最後の最後に祖父らは違うルートで父さんが帰らないことを知った。電話先で祖父は泣いたそう。

父さんの言葉によると、祖父からなじられると思った。怒鳴られると思った。ところが、今まで自分の前で一度も泣いたことがなかった祖父がそのとき初めて泣いた。電話口で押し殺したような祖父の泣き声が聞こえてくる。しかも、裏切った自分をちっとも責めない。あれは応えたなあって父さんは言ったよ。あれ以後父さんと祖父の立場は変わってしまった。自分が強く、祖父が弱くなったと感じるようになったそう。

「そう……お祖父さんやお祖母さん、たまらなかったでしょうね。でも、どうしてお父さんは九州行きの転勤話を断ったの？」

「それも聞いた。父さんは言いたくなさそうだった。でも、最後に教えてくれた。そのとき好きな女性がいてその人と結ばれたかったので転勤を断ったんだって」

「へーっ、そうなんだ。じゃあそのとき結婚した人との間に生まれた子がはてなあってわけ？」

ぼくは苦笑した。「ぼくもそう思った。でも、違うらしい。その人とはうまく行かなくて別れたって」

マーヤはため息をついた。

「そっかー。世の中ってそんなもんかもね。私なんかももしお祖母ちゃんが死んじゃったら、無茶苦茶泣きそう。小さい頃はお母さんが働いていたから、私おばあちゃんに育てられたの。だから、完全なおばあちゃんっ子。おばあちゃん病気は治ってほしいけど、別れていつか必ず来るんだよね」

「うん……」

ぼくは思った。自分は父さんに対して父さんがお祖父ちゃんに対して感じたような気持ちを持つことがあるだろうかと。今のぼくは父さんが死んで涙を流すだろうか。父さんと母さんは先々月正式に離婚となった。結局、二人は自分たちだけで離婚を決めてしまった。

ぼくと兄は父さんの方についたの、今母さんは川崎の方で一人暮らしだ。その後ぼくは母さんと会っていない。時々手紙が来る。父さんと母さんはどんななれそめだったのか、結局知らないままだ。

「ところで、マーヤはお祖母ちゃんとお母さんの三人家族と言ってたけど、お父さんはどうしたの？ 亡くなったの？ ……ごめん。失礼なこと聞いちゃって」

するとマーヤはあっさり言い放った。

「ううん、別にいいよ。父親は亡くなったんじゃなくて離婚したんだ。だから、今もどこかで生きてると思う。私が一歳か二歳の頃離婚したんだって。その後一度も会ったことがない。だから、私、父親の思い出ってほとんどないんだ」

そう語るマーヤの横顔は普段とちっとも変わらない。淡々としていた。

「そっか……そうだったんだ」

突然元気で積極的で怖いもの知らず、天真爛漫、超明るい——などと思っていたマーヤの心の中を見た気がした。ぼくが惹かれたマーヤの違う面。それはどこか孤立して寂しげな姿だった。修学旅行でもはぐれたかのように何度か一人で歩いていた。

ぼくも班員とうまが合わず結構一人でいた。だから、一人のマーヤとよく出会ったのかもしれない。

でも、マーヤは一人でいることが怖くないように見える。いつでも背筋をすっと伸ばして立っていた。マーヤのそんな強さって小さい頃からお父さんがいないせいだったのかもしれない。

ぼくはそのことを口にしなかった。マーヤはきっと関係ないって言うだろう。

それからまた他愛ない話を交わして午後二時過ぎぼくらは関内駅で別れた。「さようなら」と言いながら、ぼくらは次のことを約束しなかった。学校で会えると思った。

電車の窓から眺める外は木々の葉が赤や黄に色づいて秋景色がますます深まっている。ぼくは両親の離婚についてなぜマーヤに打ち明けなかったのかと思った。話せなかった自分が嫌になった。

[3]

翌週、連作小説のフロッピーを提出、一週間後の土曜日に合評があった。

連作小説とは夏休みの三日間学校に部員全員が集まり、朝から夕方までリレーして小説を制作した活動だ。部員は全部で十一名参加した。

顧問の堺羽根先生が出したテーマがまた例のごとく風変わりなものだった。「はちやめちや系学校小説」だの「タイムトリップ系SF小説」だの「純情コミック系恋愛小説」なんて題材が設定された。

部員はくじ引きで分担を決めると、各自が冒頭1ページ分(原稿用紙にして4枚分くらい)を書いた。そして、前の部員が書いた後に続けてローテーションしながら、次の人が書き継いでいった。持ち時間は一人一時間半。結局、完成までまるまる三日かかった。

ワープロ室にはエアコンがない。暑かったし、決められた時間の中でストーリーが崩れないよう書き継いでいくのは大変だった。中には流れを全く無視する者もいて、顰蹙どころか非難ごうごうの時があった。

小説のラストは冒頭部の作者が分担できるようにローテーションを組んだ。途中経過は見ない約束だったので、最終的に自分に回ってきた作品は思いもかけない方向に流れていることがあった。するとまたそこでも最初の作者から非難ごうごうという感じだ。しかし、この企画はすごく盛り上がったし、ぼくは楽しかった。

部員はその後完成した「連作小説」を自分の作品として改稿してきた。それを今回批評するという段取りだ。

ぼくはくじで「ゲーム系冒険小説」が当たったので、失われた古代超文明下で活躍する、王子カイと乳母子トーラスの物語を作った。ラストは地球に隕石が落下し大陸が海に沈む寸前、人々が伝説の宇宙船で脱出するという流れにした。

批評はいろいろ出た。題名が古くさいとか、B級アメリカ映画的で当たり前すぎるとか、結構辛辣だった。だが、ぼくは何を言われてもあまり気にならなかった。というのはマーヤの作品ができあがってみると、ぼくの作品と続くことがわかったからだ。

彼女の作品は宇宙空間を放浪する王妃と王子の一族がやっと居住可能な惑星を発見するという物語だった。打ち合わせたわけでもないのに、マーヤの小説は宇宙に飛び出したカイ王子の続きと取れなくなかった。

合評前マーヤから「私の連作小説、はてなの作品とかなりシンクロしてるね」と言われたときはどきりとした。何だか嬉しかった。

副部長木之元(女子)の「タイムトリップ系SF小説」のとき、堺羽根先生はSFを書くときの参考にと、次元について詳しく話をしてくれた。

堺羽根先生は木之元の小説をかなり評価している。文化祭で発行した文芸誌「百八煩惱」でも先生は木之元の「鈴のある引き戸」がベストワンだと言っていた。

「次元の考え方ってわかるかな。今の私たちの世界は三次元だ。つまり縦と横と高さがある。漫画のように平面、つまり縦と横だけで高さが無いのが二次元だ。じゃあ一次元はどうなると思う？」

みんな「？」って顔をした。

「縦が無い横だけの線だから直線だよ。するとゼロ次元は点ということになる。で、我々が理解できるのはこの三次元までだ。SFでよく四次元という言葉が出てくるけど、それがどういう世界なのかは全くわからない。それから次元の行き来は一切できない。つまり、我々は二次元の世界である平面の中に入っていけないし、平面の世界、例えば漫画の世界から人物が飛び出すこともできない。ただ、ゼロから三次元まであるし、順番から言って四次元の世界がどこかに存在するかもしれないね」

「四次元の世界ってどんなものなんでしょう」とチョリエ(女子)が聞いた。

「それは全くわからない。二次元の世界、例えば漫画は三次元に住む作者が漫画という二次元の世界を描いている。そこで主人公が活躍したり恋をしたり冒険をしたりする。

もしもその主人公たちが平面の世界で本当に生きていたとしたら、彼らは自分の一生が三次元の世界の作者によって勝手に作られているなんて思いもしないだろうね。彼らは自分の世界から抜け出すことはできないし、三次元の世界がどんなものなのか想像もできないだろう。

それと同じように今我々が生きているこの世界、つまり三次元の世界も誰か四次元世界の作者が勝手気ままに創作しているのかもしれない。君らが人物やストーリーを考え、自分の好きなように小説や物語を紡いでいるのと同様、実は我々自身も誰かが創作した物語中の登場人物かもしれないじゃないか。

バーチャル・リアリティって言葉があるだろ。非現実の世界なのに、まるで現実の世界のように感じることだ。ヘッドギアを被ると目の前にアフリカのジャングルとか宇宙空間が広がる。映像はまだちゃちゃらしいけど、そのうち精密な映像が見られるようになれば、今いる世界が現実なのか非現実なのかわからなくなるかもしれない」

「そんなことありえないと思います。だってこれが現実なんだもん」とカム(男子)。
「いや、そうかもしれない。そうなれば俺は戦艦大和の艦内に入りたい」

これはひょろとしたイカヤタツマキ。

「そうだ。よく運命とか宿命とか言うじゃん。実は自分の人生は誰かによって決められているのかもしれない。それを神とか言ったりしてるけど、つまり四次元世界の作者なんだ」と部長の遠井(男子)。彼はよく現実か非現実か、わけのわからない小説を書く。

「私は運命とか信じない。だって人生が全て決まっていたら、努力したって無駄なことになるじゃない」と木之元。

「それは四次元世界の作者によるんじゃない？」とマーヤが反論した。「運命とあらかじめ生きる主人公にするか。運命なんか関係ない、最後まで努力する主人公にするかで違ってくるのよ。でも、どっちにしても誰かが決めた人物だし、ストーリーってことね。そんなのやだな」

最後に堺羽根先生が言った。

「もしかしたら四次元の世界と言うのは天国とか地獄、または神や霊界の世界がそれにあたるのかもしれないね。人間は死後どうなるのか、全くわかっていないじゃないか。魂って存在するのかしないのか。ぼくらとしては肉体は滅んでも魂は残ると考えたい。そうすると魂が行く世界が四次元なのかもしれない。ただ、三次元と四次元で生身の体が行き来することはまずありえないと思うんだ」

そんなこんなで木之元の作品が終わると次の作品に移った。また面白おかしい内容にかなり笑いが起こって合評は盛り上がった。

全作品の合評終了後先生はみんなのフロッピーを返却した。次回の課題は今考えているところなので、しばらく本を読むなど充電してくれと言った。

帰る頃はもう「とっぷり」って感じで日が暮れていた。マーヤは家が遠く電車通学だ。堺羽根先生はマーヤを駅まで車で送ろうと言った。誰かが「うらやましい」とつぶやいた。

帰宅すると家に明かりがついていた。土曜日だが父さんにしては早すぎる。居間で大学生の誠一兄さんがテレビを見ていた。

「あれっ、どうしたの。帰ってきたんだ」

「ああ、ちょっと親父さんと話があってな。お前晩飯は？ もう食べたか」

「何だ、連絡してくれればよかったのに。近くのそば屋で済ませちゃったよ」

「そうか、まあいい。俺もちょっと食べに行行って来よう」

兄はそう言うと言っていった。ぼくは話して何だろうと思った。

浴槽には既にお湯が張ってあった。兄が入ったようだ。ぼくは風呂に入って部屋でパソコンを立ち上げ、ニフティを開いて電話回線を繋いだ。いとこののん子からメールが来ていた。

のん子は夏休みに過食症で入院した。幸い軽症で二学期からは学校に通っていた。ぼくとのはのん子はその後もEメールを交わしていた。

ぼくはちらっとメールを読むと、すぐ下に降りてのん子の家に電話をかけた。
のん子は家にいた。

〈お婆さんは？ 今家にいるの？〉

〈ううん、いないよ。まだ帰ってない。どうしたのよ突然。ママに用なの？〉

〈いや。今のん子のメール読んだんだけど……本当？ 君のママとぼくのパパが付き合っているかもしれないなんて〉

〈なんだ、そのことか。メールにも書いたけど確かな話じゃないわ。ただ何となくってことかな。ショックだった？〉

〈だってぼくのママと父さんが離婚したの九月のことだよ。のん子のママは去年の離婚だけど。それに君のママとぼくのママは姉妹じゃないか。そんなことってあるの？〉

〈だから、ホントかどうかかわからないって言ってるじゃない。それに最近の結婚とか離婚なんて日常茶飯事だから、私たちの身近にそういうことが起こっても不思議ないと思うよ。既に離婚はあったんだし〉

のん子のあっけらかんとした口調はぼくを驚かせた。結婚とか離婚てそんなに簡単にやれるものなんだろうか。

ぼくが黙っていると、のん子はさらに驚くべきことを言った。

〈それにあなたのパパと私のママは二十年くらい前に付き合っていたんでしょ。結局結婚に至らず別れて私のママは私のパパと結婚し、君のパパはママの妹と結婚したってこと〉

ぼくは呆然とした。父さんの過去にそんなことがあったなんて。じゃあ九州に帰るかどうか迷ったときの相手って、もしかしたらのん子のママだったのか。

〈だから、よりを戻したと言えるのかもしれないわ〉

のん子の声はどこか遠くからのように聞こえた。そんなことを他人事のように話す彼女にちょっと嫌悪感を覚えた。

ぼくはくらくらしそうだった。しかし、落ち着けと自分に言い聞かせた。

〈ね、のん子のことだから、本当はかなりの確信があってそんなこと言うんじゃない？ 確かな場面を見たのなら教えてよ〉

〈もうショックはおさまった？ 実はね最近ママが入浴中、彼女の携帯に電話が入ったの。そのとき私が取ったのよ。そしたら……私結構ママと声が似ているじゃない、ママだと思って親密に話しかけてきた男性が君のパパだったってわけ。おじさん、途中で気づいてちょっとあわてていた。その後がらっと変わったけど、あれは親戚と言うより男女間の話し方だったな〉

〈そう……〉

勘の鋭いのん子のことだ。間違いなさそうだ。

電話を切ってもぼくはぼんやりして暫くショックが抜けきれなかった。兄貴はこのことを知っているのか。それで帰ってきたのか。それとも何か別のことなのか。兄に確かめてみようと思った。

それから三十分ほどして兄が戻ってきた。階下に下りると兄は冷蔵庫から缶ビールを取り出すところだった。外でも飲んだのか頬が赤い。

兄は飲むかと言った。ビールは苦いだけなのでぼくは断った。

「どうした。深刻な顔して。何かあったのか」

兄はぐびっとビールをあおった。

「今日帰ってきたのはどうして。父さんとの話って何なの？」

ぼくは逆に聞いた。

「ああ、うん。来年は俺も四年だろ。で、就職活動をしなきゃならない。実はボランティア関係の団体の職に就きたいと思っているんだ。しかし、父さんは自分の会社に入ることを勧めている。今は不況の世の中だろ。ろくな職がないし、大企業は倍率が高くて結構難しい。しかし、父さんの会社なら一部上場の中堅企業だし、部長である父さんのコネクションで何とかもぐり込めるってことだろう。だが、俺はそんなサラリーマン生活はまっぴらごめんで、自分が大学でやってきたボランティア活動の延長として、できたらそういう関係の職に就きたいという気持ちなんだ」

兄はまた缶ビールに口をつけた。

「そうだったんだ。前にも話聞いたけどボランティア活動ってそんなに面白いの？」

「そうだなあ。面白いと言うよりやりがいがあるってことかな。いろいろ非政府系のボランティア活動に参加したけど、国内にしても外国にしても、救いの手を待っている人たちは数え切れないほどなんだ。個人の力ではとても小さくて無力感に陥ることがある。だから、集団で活動することが多い。自分の手助けによって相手が喜んでくれると、自分が役に立っていると思ってうれしくなるんだ。金儲けとか生活のために働く以上の充実感がある。だから、俺は卒業後もボランティア関係の事務局とか、関連した団体の職に就きたいと思ったんだ」

「でも、父さんは反対ってわけ？」

「まあな。身分的に安定しないし、将来的な保証もないというのが反対の理由なんだ。しかし、俺はそれ以上の充実感があると思っている」

兄はそう言うともたまたまビールをあおった。

「父さんは頑固だから説得は難しいかもね」

「まあな。がんばるよ」

「ところで、浮浪者って言うかホームレスの人たちがいるよね。兄貴はそんな人たちのボランティアもやってるの？」

「いや、俺が関係している団体では直接関わっていない。日本も最近増えてきた。アメリカのホームレス、南米ではストリートチルドレンとかいう子どものホームレス。ヨーロッパだってホームレスは多い。アフリカでは何分に一人という割合で子どもが飢餓で死んでいる。酷いもんだ。国連のユニセフなんかが救いの手を差し伸べているけど、圧倒的に金と人手不足だ。ボランティアだけでは手が回ら

ないよ」

「何で世界中からそういう不幸がなくなるんだろう」

「そうだよな、政治とか経済、南北格差、戦争、最近では民族間の対立とか、いろいろあるんだろうが」

「ぼくは思うんだ。今核ミサイルとか戦車や機関銃とか戦争のための兵器の製造をやめて、そのお金を全て飢餓とか環境問題の解決に回す。そうすれば世界はかなり良くなるんじゃないの。なぜ人間はできないんだろう」

「そうだなあ。お互いヨーイドンで全ての兵器を破棄します、今後一切武器弾薬は作りませんと宣言すればできそうだけどな。たぶんお互い相手のことが信用できないんだろう。人類は大昔から対立と争いの歴史しか生み出していないから」

「そう思うと、こんなに文明が進歩して教育とか行われているのに、人間は昔とちっとも変わっていない。むしろもっと悪くなったかもしれない。人間てもう限界なのかしら」

ぼくの顔はよっぽど暗かったのか、兄は笑いながら言った。

「まあ、そう悲観的になるな。人間は確かに悪い面をたくさん持っている。しかし、良い面だってある。世界中のそんな問題に日々立ち向かっている人もいるんだ。お前はまだまだ高校・大学でしっかり充電……つまり勉強して社会や歴史のことを学ぶときだと思う。ただボランティアに参加してみたかったら言ってくれ。紹介するから。最初は恥ずかしいとか、受け入れてくれなかったらどうしようとか、ちょっと抵抗があるけど、始めてしまえばすぐ溶け込んでいける」

「そう……やりたくなったら連絡するよ」

ぼくらはそれで話を切り上げた。

ぼくはのん子から聞いた話を兄にしたいと思ったけれど、結局やめにした。兄は自分のことで忙しそうだ。

父さんが帰ってきたのは午後十時過ぎだった。その夜遅くまで二人はいろいろ話し合っていた。時折激しく言い争うような声が二階まで聞こえた。兄の説得は難航していそうだった。ぼくの出る幕じゃないので、ぼくは下に行かなかった。

翌日兄は朝食後すぐ大学に戻るため家を出た。父さんとの話し合いがどうなったか聞き損ねた。たぶん一度の話し合いくらいでは決着しないだろう。

父さんも出かけると言って背広に着替え始めた。

ぼくは父さんを玄関口で呼び止めた。「ちょっと話があるんだけど」

「何だ、話って」

「父さん、のん子ちゃんのママと付き合っているって聞いたけど本当？」

「……」

「やっぱり本当なんだ」

「のん子ちゃんから聞いたのか。付き合っていると言ってもちょっと前まで親戚関係だった人だからな。いろいろ相談に乗ってあげることもある。その程度だ」

「そんなことじゃないよ。男と女としてどうなのか……ってこと。それに母さんと離婚したんだから、父さんとはもう親戚関係じゃないでしょ」

父さんは苦笑した。ぼくは少し苛つきだした。
「子どもだと思ってごまかすのは止めてくれよ。ぼくだってもう大人なんだ」
父さんは玄関に座り込んだ。ぼくも廊下に座った。

「そうか、じゃあ話そう。確かにのん子のママとは最近時々会うようになった。しかし、まだ深い間柄じゃない。彼女とは今後深く付き合うかもしれんし、そうならないかもしれない。それは自然のなりゆきでまだわからない。もちろん再婚なんて考えてもいない」

「でも、母さんと離婚したの九月のことだよ。そんなに簡単に次の人と付き合うようになるの。もしかしたら、離婚前からのん子のママと付き合っていたの」

「いや、それは違う。のん子ちゃんのママと付き合うようになったのは離婚後のことだ。それに母さんとは離婚は九月だが、昨日嫌になって今日すぐに離婚したわけじゃない。離婚に至るまでの積み重ねというか、お互いすれ違いがあって…それでどうしようもなくて離婚に至るんだ。だから、お互いの心はその前から冷めていた。そういうことだ」

「そう……」

「幸二、お前にはお前の生き方がある。そして、私には私の生き方がある。もうお前も充分大人になった。だから、お互いあまり干渉しない方がいいと思う。私はお前がどんな彼女を連れてきても何も言わない。お前の好きなように生きていいし、お前の好きな人と結ばれればいい」

「でも、兄貴の就職に関してはかなり反対しているんだ」

父さんはまた苦笑した。

「あれはな。ボランティアなどと誠一の考えが甘いから、世の中そんなに甘いものじゃないぞと言ったんだ。好きにしていっていいと思っているが、お前たちのためにならんことだったら反対するさ。俺の子どもだからな」

何だかちょっと矛盾しているような気がした。

「それじゃあ、ちょっと急いでいるんで、またじっくり話そう」

そう言って父さんは慌ただしく出ていった。

その後ぼくは部屋に閉じこもった。

父さんの言葉がちょっとショックだった。「好きなように生きていい、干渉しないようにしよう」と言った。それが父さんの本音なのか。ぼくは家族だからいろいろ心配し合うべきじゃないか、と思う。ところが、父さんはそれを干渉という。

のん子のママも夏休みにのん子が過食症でひどい状態になったとき、何を食べるかは彼女の自由だと言った。しかし、それは自由というより子どもに関心がないだけじゃないのか。

それに父さんはぼくより兄貴に期待している。兄貴がやることにはいろいろうさいけど、ぼくのこととは無関心で感じだ。小さい頃から何となくそんな風に感じていた。

ぼくは父さんのことも母さんのことも、家のことなんかどうでもいいと思った。

ぼくはぼくのやりたいことをやろうと。

それからパソコンを立ち上げた。何か小説を書きたい気分だったが、まだ次の課題が発表されていない。以前書いた小説の誤字脱字を直すことにした。文化祭から修学旅行にかけてのフロッピーと連作小説のフロッピー。フロッピーは二枚あった。

ぼくは一太郎を立ち上げ、修学旅行合評後に返却されたフロッピーを開いた。

フロッピーには自分の作品ファイルが三つ入っている。ところが開いてみると、それ以外に「梗概1・2」という見知らぬファイルがあった。

ぼくは「？」と思った。そんなファイルを作った記憶がない。何だろうと思ってダブルクリックした。先生のファイルが誤って入ったのかもしれない。

すると、パスワード書き込み画面が現れた。やはり堺羽根先生のファイルのようだ。大切なものだったらパスワードぐらいつける。

ダメだろうと思いつつ、パスワードを打たずに「OK」ボタンを押してみた。すると意外にも接続音がしてファイルが開き始めた。パスワードを設定していなかったのかもしれない。

すぐに梗概Ⅰ「ヒロシマへの道―さみしさ二人旅―」と題された梗概が画面一杯に広がった。作者名「サカイバネ」とある。

先生の(とても単純な)ペンネームだ。やはり先生が書いた梗概のようだ。たぶん何かの手違いでぼくのフロッピーにコピーされたんだ。

悪いと思いつつ興味津々で読み始めた。読み終えるころには眠気が覚めてしまった。

そして、画面を下にスクロールして梗概Ⅱ続編「はてな、遠い世界へ(仮題)」を読んだとき、ぼくは大袈裟でなく頭をハンマーで殴られたような衝撃を感じた。思いもかけない内容が書かれていたからだ。

ぼくは「修学旅行の出会いも横浜のデートも作られたものだったのか」とつぶやいた。顔から血の気が引くような気がした。

[4]

翌日放課後ぼくはマーヤを体育館の裏に呼び出した。昨夜はほとんど一睡もできなかった。それで今日の授業はのきなみ寝たきりって感じだった。隣の男から「お前時々うなされていたぞ」と言われたときはドキっとした。ぼくは病人のような顔をしていたかもしれない。

マーヤは通称「芸術の森」という松林の小道を小走りにやって来た。話が終わったらすぐ帰るつもりなのか、マーヤもカバンを持っていた。

「どうしたのよ？　こんなとこに呼び出して」

ぼくはマーヤの顔をじっと見つめた。怖い顔だったのか、マーヤがちょっと後

ずさりした。

「マーヤ。ぼくは……消えて行くしかない。ぼくはバーチャルな存在なんだ」

「……？」

マーヤはわけがわからないって顔をした。当然だろう。

ぼくはカバンから昨日のフロッピーを取り出した。表には「文芸部提出FD 久保はてな」と書かれた紙が貼ってある。

マーヤは手に取って表を見、それから裏返した。裏面には何も書かれていない。依然わけがわからないって顔をしている。当然だ。

ぼくはマーヤの目を見ながら、一言一言叫ばないように注意しながら言った。

「この、フロッピーの、あるファイルにあったんだ。ぼくは誰かに作られた存在で、そして来年の一月三十一日に消滅するって」

マーヤは大きく目を見開いた。瞳の奥が一瞬青く光ったような気がした。

「何バカなこと言ってるの。どうして君がバーチャルなの！ はてなは今私の目の前にいる。私がこの目で見てるじゃない」

「無理だよ。神には逆らえない。神はぼくの最期を来年の一月三十一日って決めたんだ」

「神って何よ。誰のこと？ 君は神の声でも聞いたの？」

「堺羽根先生だよ。堺羽根先生がぼくの死を来年の一月三十一日にしたんだ」

マーヤは一瞬ぼかんとしてそれから顔をゆがめるように大笑いした。

向こう向きになったり腹を抱えたり、そして、笑いながらぼくにフロッピーを返した。ぼくは真面目な顔でフロッピーをポケットに戻した。

マーヤの笑いはなかなか止まらない。涙さえ流して笑っている。確かに悪い冗談としか聞こえないだろう。あの優しい堺羽根先生が人の死を決めるなんて誰が信じよう。

芸術の森を冷たい風が吹き抜ける。グラウンドから野球部のヘイヘイって声が流れてくる。マーヤの笑い声はいやに大きく響き渡った。

笑いがおさまるのを待ってぼくはポケットから折り畳んだA4用紙を取り出してマーヤに渡した。彼女は涙目を拭いてそれを開くと、「何これ」って感じで読み始めた。

梗概 I 「ヒロシマへの道—さみしさ二人旅—」 サカイバネ

1998年4月～8月

文芸部員 久保はてなはY高音楽コースの生徒。

- 1 二年四月、文化祭冊子テーマ「さみしさ」の開示。マーヤ（一般コースの生徒で文芸部員）
- 2 帰宅（ママは実家へ 従姉のん子のその後）五月ため息、夜更かし、読書、書き散らされた創作類、ギター、作曲……劣等感。
- 3 中間テスト、成績急降下。学校では寝てばかり。のん子とのメール。

- 五月「公園を描く」強制デート(くじびきは偶然はてなとマーヤをペアにする)。
はてなのほのかな思い。マーヤとの強制デートを作品にする
- 4 のん子の小説。彼女の過食症、ぼくの不安。マーヤも読む。
- 5 六月「丸木美術館」訪問。前夜父への反発。丸木美術館の原爆の図にショック。
S先生「広島へ連れていきたくかった」。丸木美術館の作品化。母に手紙を書く。
母の返事で「ノーモア・ヒロシマ」を知る。はてな、少しずつ曲をつける。
- 6 七月期末はさんざん。日本史だけは関心、留年の恐怖。マーヤ突然「夏休み
に広島へ行こう」はてな「……?!」部員に話すがうまくいかない。
- 7 ひそかな計画、ぼくとマーヤだけ。突然のん子のメール「助けて!」彼女の家
へ。冷蔵庫の前で食べまくるのん子。「止めてくれよ」トイレへ、吐いて戻すの
ん子。酔っぱらって帰って来たのん子の母。「彼女の自由」怒るはてな。のん子
は結局入院。
夏休み前はてなとマーヤの広島行きがばれる。S先生が「責任をもって引率す
る」と。はてなとマーヤ、S先生の三人で八月六日広島に行くことになる。
独身S先生の孤独。「さみしくないの?」「もう慣れた。それに報いはやがて
やって来る。ぼくはそれに耐えなきゃならない。親捨ての報いでもあるし」
七月後半バイト、文芸部全員で連作小説をつくる。
- 8 八月五日夜横浜発、広島へ。マーヤと一緒に夜行特急。S先生も。
深夜マーヤに「ノーモアヒロシマ」の楽譜を見せる。マーヤ楽譜を読める。
八月六日広島。平和祈念式典会場。終了後の歌の輪、ギター。
マーヤ突然「ノーモアヒロシマ」を歌おうと言い出す。はてな伴奏。
S先生「やるじゃないか」
資料館の見学。ショックが少なかったはてな。マーヤはショック。
広島駅でS先生と別れ、はてなとマーヤは帰りの新幹線に乗る。(終)

マーヤは梗概メモをしばらく読んでいた。顔を上げたのでぼくは言った。
「見てわかるだろ。微妙に違う部分もある。例えばぼくは音楽コースの生徒じゃ
ない。それに成績だってそんなに悪くない。けど、ぼくらはほぼこの梗概通りに
行動していたんだ。のん子のことも書いてある。S先生でももちろん堺羽根先生の
ことだろ?」

マーヤは別に慌てた感じではない。

「でも、それは……私たち文芸部員だし、堺羽根先生は顧問で、広島まで一緒だ
ったから、私たちのことを小説化しようと思って梗概にしていたんじゃないの?

そんなことよくあるじゃない。先生だって文芸部顧問なんだから小説ぐらい書
くだろうし。だから、材料を私たち文芸部員から集めたんだわ。この梗概と君が
来年一月三十一日に死ぬことと、どんな関係があるの?」

「確かにこれはそういう風に取りれる。ではこっちの梗概はどう?」

ぼくは別の紙片をまたポケットから取り出した。本当は見せたくなかった。だ

が、「梗概Ⅰ」だけで納得させるのは無理なようだ。

梗概Ⅱ 続編「はてな、遠い世界へ(仮題)」 サカイバネ

1998年10月～1999年1月31日

- 1 九月文化祭。冊子『百八煩惱』製作。十月北海道修学旅行。
はてなマーヤと偶然三度二人だけになる。トラピスチヌ修道院、函館山の夜景、
富良野Pホテルの夜明け。はてなマーヤへの思いがつのる。
第十五回課題「修学旅行」。はてなマーヤとの三度の出会いを書く。
 - 2 第十五回合評「修学旅行」。恥ずかしがるマーヤ、提出したことを後悔するは
てな。マーヤに謝ろうとデートを申し込む。
 - 3 初めて二人だけのデート。横浜山下公園、人形館。横浜球場。謝るはてな。
はてな祖父、父のことを語る。純粹、異和感、父母の離婚。
 - 4 第十六回課題「連作小説の完成」はてなとマーヤのシンクロ率高い。
 - 5 第十七回課題「変身譚—花びらカマキリ」創作に苦しむはてな。
翌年一月文化祭冊子「百八煩惱」県教育長賞受賞。喜ぶ部員達。マーヤ変身。
 - 6 一月三十一日「変身譚」の合評。はてな学校の帰路、国道16号線の交差点で
車にはねられる。はてな消滅。次の課題は「地獄物語」。はてな死の世界へ。
 - 7 悲しむ部員達、はてなの葬式。(終)
-

辺りが薄暗くなってきた。風も強さを増している。

ぼくはマーヤが二度ほど読み終わった頃合いを見計らって話し始めた。

「先日夏休みの連作小説を完成したよね。まだ次の課題は発表されていない。と
ころが、これには第十七回の課題として『変身譚』と書かれている。ま、それは
先生の頭の中の予定だから、ここに書いてあっても不思議じゃない。

しかし、決定的なのはこれだ(ぼくは5の二行目を指さした)。文化祭の冊子が教
育長賞を受賞するなんて、十二月末か一月にならなきゃわからないはずだ」

今はまだ十一月初め。それでもマーヤは驚かない。

「そうかしら。堺羽根先生はもう結果を知っているんじゃない？ 先生は九月末
に『百八煩惱』を高校文芸誌コンクールに送ったと言ってたじゃない」

「いや、違うと思う。先生はコンクールの役員じゃないし、いくら何でもまだ結
果は出ていないと思うんだ。第一君は先日行った横浜のデートのことを先生に話
したかい」

「……！？」

マーヤが絶句した。たぶん顔が青ざめただろう。梗概メモの異常な点にやっと
気づいたようだ。

「ホント！ なぜ先生はあのことを知っているの？ 私、お母さんにだって話していないのに」

「ぼくだってそうだ。家族の誰にも行き先を告げていない。まして先生に言うはずがない。二人だけの秘密だもの。だったら、なぜ梗概に横浜デートのことが書いてあるのさ？」

ぼくの背筋を改めて悪寒が走る。マーヤも半信半疑ながら、次第に深刻な顔になってきた。

マーヤはもう一度メモに目を通した。そして、急に怯えた声になった。

「ね、このマーヤ変身て何？」

「わからない。まさか君が花びらカマキリに変身ってことじゃないだろうね。きれいなカマキリだったら見たい気もするけど」

ぼくは冗談めかして言ったのに、マーヤはにこりもしない。そりゃそうだ。カマキリに変身なんて死ぬより嫌なことかもしれない。

「ごめん。冗談です」

「でも、おかしい点もあるわ。地獄物語って来年一月の課題になっているけど、既に今年の一月から三月にかけて作り上げたじゃない。妙だわ」

「そうなんだ。そこんところはぼくにも訳がわからない」

「……」

マーヤもぼくも暫く黙って考えた。この梗概が謎だらけなことは間違いない。何よりもしもこの梗概通りだとすると、ぼくは来年一月三十一日車にはねられて死ぬってことだ。その前にはマーヤが何かに変身する……。

突然マーヤは叫んだ。「そんなことってない！ 絶対にありえないわ。はてなが一月に死んでしまうなんておかしいよ。私の変身だって今の世の中で、そんなこと現実に起こるわけじゃない。きっとこれは何かの間違いか、堺羽根先生が未来を予言しただけの……」

マーヤはまた絶句した。自分で言ったことの怖さに気づいたようだ。

「そうなんだ。仮に予言だとしても、何で堺羽根先生がそんなことを予言するんだ。ぼくの死まで予想するなんてものすごく失礼じゃないか。

逆にもしこれが真実なら、やっぱり彼は人間じゃない。神様か何かってことになる。だとすると、これは現実に起こるかもしれない。あるいは、まるでSFだけど、彼はタイムトラベラーとして過去や未来を見てそれを書き留めたのか……」

マーヤは押し黙った。ぼくも黙った。風の音だけが寂しげに鳴っている。

ぼくらは二人とも堺羽根先生に会って真相を確かめようと言い出せずにいた。

よくあるSF小説のように、これが秘密の真実なら、会って尋ねた途端に記憶を消されるかもしれない。あるいは、「素材は君たちだけど、全てフィクションだよ、メンゴ、メンゴ」とか何とか言って適当にあしらわれるのが落ちだ。

ぼくらは考え疲れた。あたりがかなり暗くなってきたので、とりあえず帰ることにした。F駅まで歩くと三十分はかかる。ぼくはマーヤを駅まで送っていくこ

とにした。

しばらく歩いてSセンターの正門前を通った。マーヤと二人だけでここを歩くのは五月の強制デート以来だ。

Sセンターを過ぎたところでマーヤがぼつりと言った。

「ね、はてな……君のお父さんとお母さん、離婚したの」

ぼくは立ち止まってあちゃあと思った。梗概にはそのことも書かれてあったんだ。

「うん、今年の九月に。ごめん、言うの忘れてた」

「そう……」

マーヤはまた黙って歩き始めた。ぼくも続いた。前もって話しておくべきだと思った。しかし、もう遅い。マーヤは梗概の内容がどこまで真実なのか、確かめようとしているのだろうか。

それから暫くしてまたマーヤは呟くように言った。

「はてな。君は私を愛するようになったの？」

どきっときた。何て「単刀直入」な質問なんだ。ぼくは薄闇の中で顔が真っ赤になった。呆気にとられてどぎまぎして言葉が出てこなかった。

マーヤは続けた。

「あの梗概がほんとなら、1に書かれていたこともホントかな……と思って」

ぼくは決心した。自分の心に正直に話そうと思った。

「うん、ほんとのことだ。怖いけどぼくの気持ちはあの通りだ」

「そう。でも、君が愛した私ってホントの私じゃないと思うな。君の心の中に描かれた私だと思う」

それだけ言ってマーヤは口を閉ざした。

今度はガーンときた。そして、こんな時に、なんて残酷な言い方なんだと思った。マーヤのそんな反応も言葉も、梗概には全く書かれていないのに(そうか、この恋が成就するとも書かれていないか)。

ぼくは言葉が出てこなかった。どう言ったらいいのか。それはいわゆる「理想化」ってやつだろうか。しかし、ぼくはマーヤの何を、どのように理想化したと言うんだ。

マーヤはそれ以上説明してくれなかった。一体彼女はぼくをどう思っているのか、それを聞きたい気がした。が、同時に聞くのが怖いような気もした。

やがて国道16号線のF十字路に出た。ここからは人通りが多いのでここで別れることになる。

交差点を渡ったところで、マーヤは「じゃあ、明日また相談しよ」と言って駆けていった。

ぼくは「うん、さようなら」と応じた。さっきの返事をする機会をのがしてしまった……。

振り返って交差点を眺めた。16号線はライトを灯した車が猛スピードで走り抜けてゆく。今後ここだけはものすごく慎重に渡ろうと思った。少なくとも来年の

一月三十一日だけは来ないようにしよう。

[5]

ぼくはぐったり疲れて家に帰った。真っ暗な中蛍光灯のスイッチを探る。明るくなったけれど、辺りはしーんとしている。兄は昨日の朝大学に戻ったし、父さんはまだ会社から帰っていない。

部屋はひんやりしているのに、妙に汗ばんですごく喉がかわいていた。冷蔵庫にあった昨日の残り物を取り出し、ついでに父さん用の缶ビール、三五〇ミリリットルも出した。苦いだけのビールだけれど、何か「酔う」という気持ちにならずにおれなかった。

あと三ヶ月の命だし、マーヤにやふられるし……。ぼくはそう思ってビールをごくごく飲んだ。苦い。しかし、喉を一気に下る爽快感があった。

ぼくは初めてビールを「うまい」と思った。苦いけどなぜかうまい。そっか、ビールってちびちび飲むんじゃなく、こんな風に一気に飲むものだったんだ。酒の味を死ぬ前にちゃんと味わえて良かった……とぼくは妙に感傷的な気分になった。

ぼくはさらに残りを一気に飲みした。でも、うまかったのは最初の一飲みだけ。顔がかあっと熱くなった。急に足がふらつきだした。しかし、少しだけ落ち着いた。

残り物で夕食を済ますと、ぼくは自分の部屋に入った。何だかくらくらする。ベッドに倒れ込んで天井の木目を眺めた。壁のポスター、本棚の本、漫画、そして机上の蛍光灯やパソコンに目をやった。家全体がしーんとしている。

酔っぱらいのような気分の中、今この家には自分以外誰もいないんだと思った。心が締め付けられるような寂しさを感じた。

母さんがいれば心の中のものもやもやを洗いざらい吐き出したらだろうに。子どもの頃のように胸に飛び込んで、わんわん泣いたかもしれない。しかし、今この家に母さんはいない。それにいたとしても、もうその胸に飛び込むことなどできやしない。

「マーヤ……」ぼくはマーヤを思った。今この部屋にマーヤがいてくれたら。マーヤが母のようにぼくを抱いてくれたらと思った。そんなことはありえない。でも、想像するのは自由だ。しかし、マーヤが本当にここにいたとして、マーヤは甘えかかるぼくを拒絶するような気がした。彼女なら「甘えるんじゃない！」なんてことを言いそう。それでもぼくはもたれかかってみたい……。

ぼくははっとした。これが理想化ってことなんだろうか。ぼくが思い描くマーヤのイメージ。明るくて積極的で天真爛漫。そして、優しく清らかな感じ。恋人

のように、時には母のように優しくぼくに対してほしい、彼女はぼくがそんな風に思っていることを「理想化」と言ったのか。

ぼくは以前マーヤの茶髪や派手なマニキュアを見たり、彼女がアイドルや芸能系のことを語るとき、何となく少し失望していた。彼女にはコギャルみたいであってほしくない。ぼくはいつの間にかそう思っていたのだ。

でも、彼女は、マーヤは、ホントはコギャルなのかもしれない。文芸部に入部するくらいだから普通のコギャルでないことは確かだ。ぼくが思っているマーヤはぼくが心の中でつくりあげたマーヤで、それはありのままの彼女とは違う。マーヤはそう言いたかったのかもしれない。

ぼくはベッドの上でぐるぐる回転した。酔っぱらいのようにろれつの回らぬ口調で「バッカやろう」と叫んでみた。でも、むしゃくしゃした気持ちはちっともおさまらない。

マーヤとこれからどう付き合えばいいのか。今日のことはやっぱり失恋なんだろうか。しかし、マーヤは別れるとき「明日また相談しよ」と言った。それが唯一の救いだ。それにぼくらはまだ恋人同士じゃない！

そのときぼくは「梗概メモ」を思い出した。ぼくとマーヤの恋が片思いじゃなく両思いになると、なんで書いてくれなかったのか。と同時にまた背筋が寒くなった。もしもメモが真実だとすれば、ぼくは来年一月までの命じゃないか。あと三ヶ月もない。そっちの方が重大問題だ。一体どうすればいいのか。

ぼくはベッドから跳ね起きてパソコンに向かった。困ったときののん子頼み。のん子にメールを出して相談しようと思った。

ぼくは鞆からフロッピーを取り出した。例の梗概をニフティのメール画面上にコピーしようとフロッピーを開いた。

「……?!」

ない!……「梗概1・2」がなくなっている！

ぼくは「ファイルを開く」を消して再度「3・5インチFD」の箇所をダブルクリックした。

……やはり、ない。自分が打ち込んだ三つの作品が出てくるだけだ。

一体どういうことなのか。

ぼくはフロッピーを取り出して表書きを見た。「文芸部提出FD 久保はてな」と書いてある。印刷された文字だが間違いない。このフロッピーだ。

何で? なぜ消えたのか? 何もしていないのに……。

はっと思ってぼくはポケットからくしゃくしゃになった梗概メモの用紙を取り出した。

「あった……」

そこには「梗概1・2」がちゃんと残っていた。

ぼくはほっとした。プリントしておいてよかった。梗概ファイルにはパスワードがあった。昨夜はパスワードを入力しなくても開くことができたから、きっと

何らかの理由で堺羽根先生以外の者がファイルを開くと、消えるようになっていたのだ。今の技術でそんなことはできない。しかし、神の世界だったら何でもないことだろう。ただ、神だったらなぜこの用紙自体も消去しなかったのか。

「いずれにしても明確な証拠はなくなった……証拠湮滅ってことだ」

だが、これであの梗概は一層信憑性が高まったと言えるかもしれない。いよいよもってどうにかしなければならぬ。そんな決まり切った運命に負けてたまるか、とぼくは思った。マーヤとのことだって……。

翌日ぼくはふらふらしながら登校した。体全体がぐったり重い。その上吐き気を催す。寝不足と疲労と失恋の痛み……てか？　そして、もしかしたら生まれて初めての二日酔いだ。

昼休み、マーヤのクラスに行ったらマーヤは欠席していた。

マーヤは翌日も休んだ。梗概メモがショックで寝込んだのかと心配になった。

文芸部の女子に聞いてみると、マーヤのおばあちゃんが危篤状態で休んでいるとのことだ。

ぼくは梗概メモのことを相談できる人がなく、かなりいらついた。先生に直接聞けないし、他部員だって相談できない。そんなことしたら「面白い梗概だね」と笑われるのが落ちだ。ぼくはマーヤが登校するまで待つしかなかった。

二日後とうとうマーヤのおばあちゃんが亡くなった。たまたま職員室に入ったとき、黒板に「綾部摩耶、祖母死去のため三日の忌引き」と書かれてあった。

彼女の実家は遠くで葬式には行けないし、ぼくは香典でも送ろうかと思った。父さんに相談すると、「友人の父母ならそうしてもいいが、祖父母だと普通そこまでしない」と言われた。「ましてお前は学生だから、次に会ったときお悔やみを言えればいい」とも。

それから一週間後マーヤはやっと登校してきた。忌引き日数以上に休んだことになる。ぼくはここ数日朝八時過ぎには昇降口のところでマーヤを待った。どうしても至急相談したかったからだ。三日前堺羽根先生から次の課題が発表になった。先生は「第十七回の課題は『変身譚—花びらカマキリ』。締め切りは一月初め」と言った。ぼくはそれを聞いて顔が青くなった。

待ち始めて三日目の朝、やっと正門を歩いてくるマーヤを見つけた。ぼくは一目散に走って行った。

びっくりした。やや伏し目がちに歩いてくる彼女はたった十日ほどで、こうまでと思うくらいやつれはてていた。ふくよかだった頬が少しこけ、身体全体が痩せて小さく見える。顔色も青白く、ほとんど病人という感じだ。

大好きだった祖母を亡くした心の痛みはぼくにも経験があるだけに痛いほどよくわかる。そして、心痛の一部にぼくとの一件もあるかと思うと、ぼくの心はすまない気持ちで一杯になった。

「おはよう、マーヤ。大丈夫……？」

ぼくが声をかけるとマーヤは顔を上げた。

「ああ、はてな。うん、大丈夫……」

マーヤは弱々しげに応じた。

「おばあちゃんが亡くなったんだってね。お悔やみ申し上げます。ご愁傷様でした」

ぼくが不器用に頭を下げながらそう言うと、マーヤも立ち止まって丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます。祖母が生前中は一方ならずお世話になりました。本日はまた丁重なお悔やみの言葉、本当にありがとうございます」と頭を下げたままと言った。ぼくもあわてて礼を返した。

そうしたらマーヤはそのままの姿勢で「くっくっ」と押し殺したような笑い声をもらした。

「……？」とぼくが思っていると、マーヤは顔を上げ、半分笑いながら言った。

「なーんてね。ああ可笑しかった。はてな、一体その言葉誰に教わったの。何だか似合わない。私も弔問客に何度同じ言葉で答えたことか。お葬式ってホント大変」

ぼくはマーヤの豹変ぶりに二度びっくりした。それからマーヤはしみじみ話し始めた。

「おばあちゃんが亡くなる前と通夜の時が一番辛かったな。お通夜の日わたし一晩中起きておばあちゃんの側にいた。おばあちゃんのことを思い出すと、その度必ず涙が出るの。けど、火葬になって骨ばかりになったのを見て何だかふっ切れた。はてな、火葬になった骨って見たことある？」

「ううん、ない。おじいちゃんの時是用事で火葬場に行けなかったんだ」

「私、理科の人体標本のように頭とか胸とか手とか足とか、遺体は骸骨の形をしてると思ってた。そしたら違うの。完全にばらばらの骨になってそれが灰の上に散らばって、一体どこの骨かちっともわからないの。歯がついた顎の骨が辛うじておばあちゃんとわかったくらい。お母さんはそれを見てこんな変わり果てた姿になって……と言って泣いていた。

でも、私は骨の残骸を見たとき、あ、こんなものおばあちゃんじゃないって思った。おばあちゃんはどうかへ行ったんだって。身体が燃えたと言うより、おばあちゃんが消えたって言うか……どこか違う世界へ行って、そして今でも生きている。そんな気持ちになったの。それでふっ切れたってことかな」

「そう……良かった。顔色が悪いので今にも倒れるかと思った」

ふっ切れたと言っても火葬からさらに二、三日休んでいる。立ち直るのに必要な日にちだったんだろう。今もマーヤの顔色は良くない。無理してるなと思った。しかし、そんな弱みを見せないのがマーヤだ。

「それよりはてな。休んでいる間あの梗概メモのこと考えてみた。第十七回の課題は花びらカマキリになったって？」

「そうなんだ。誰かに聞いたの？ 三日前だったかな。先生は花びらカマキリのビデオも見せてくれた。蘭の花びらに似た白いカマキリなんだ。結構美しかった。でも、花びらカマキリって幼虫のときはとても鮮やかな赤と黒のツートンカラーなんだ。不思議だよ。鳥が食べないよう苦い虫と同じ体の色になるんだ。それによって生き延びる確率が高まるらしい。

赤と黒の幼虫が真っ白なカマキリに脱皮するんだからすごかった。そうすると白い蘭の上にも、花びらと全く見分けがつかない。カマキリはそこで待ち伏せして知らずにやって来た小虫を、その鎌でぱっとつかまえて食べてしまうんだ。みんなはビデオを見た後変身ものか、面白そうだと騒いでいたけど、ぼくはもうショックで寝込みたかった」

「そう……でも、うじうじ悩んでいたって仕方ないわ。私決心した。堺羽根先生に直接当たってみるのよ。何かわかるんじゃない？」

「ええっ、そんなこと。無理だよ。証拠のフロッピーはなくなったし、梗概が書かれた紙は残っているけど……第一しらばっくれるに決まってるよ」

「あのフロッピー、失くしたの?!」マーヤが血相を変えた。

ぼくはフロッピーの中のファイルだけがいつの間にか消えていたことを話した。「そうか。じゃあ証拠は印刷された『梗概』だけになったってことね。でも、私が考えた直接堺羽根先生に当たるとするのは先生を問いつめることじゃない。先生の家を訪ねて探してみようということなの」

マーヤはもっと大胆なことを言う。

「ええっ、無理だよ。先生の家ってどこなのさ。どうやって家の中に入るんだよ」

するとマーヤはいたずらっぽく笑いながら「驚天動地」の話をし始めた。

「実は昨日、学校に行くふりして家を出て、Hにある先生のアパートに行ってきたの。午前中なら先生は出勤してるでしょ。先生の住所は知っていたし、前にH高校のすぐそばって聞いてたからT荘はすぐ見つかった。

先生独身でしょ。たぶん玄関口の上か郵便受けなんかに部屋の鍵を置いてるんじゃないかと思ったの。そしたら案の定掛け置き式の郵便受けの裏に貼ってあった。たぶん合鍵だと思う」

「まさか部屋の中に入ったんじゃない？」ぼくはひやひやしながら話を聞いた。

マーヤはまたいたずらっぽく笑う。段々顔色が良くなってきた。

「そのまさかよ。妹が訪ねて来たって感じで堂々と入ってやったわ」

「まったく危ないなあ……で？ 中はどうだった？」

ぼくは声をひそめた。マーヤも声を落とした。

「やっぱり妙だった。普通先生の家って書棚に本とか雑誌とかたくさんあるんですよ。でも、書棚どころか本が一冊もなかった。というより冷蔵庫とかガスコンロとか食器棚。それにタンスとか、そういった生活に必要な家具調度類が全くなかったの。だから、約六畳二間の部屋はがらんどろって感じ。

ただ、部屋の真ん中辺りに机があって、その上にパソコンが載っていた。パソ

コンはインターネットと繋がっていたのかしら。画面は何かしら動いていた。私はパソコンのことよくわからないので、それだけ確認して部屋を出たの。はてなパソコンに詳しいから、後は君と二人で来ようと思った」

ぼくはマーヤの「大胆不敵」ぶりにあきれた。しかし、この話からすると、やはり堺羽根先生は梗概に関して何らかの秘密を握っていそうだ。

ぼくらはいつの間にか堺羽根先生を悪人と決めつけていた。そりゃそうだ、人の死とか変身を予想する人間がいい人のわけがない。

「わかった。いつ行こう？」

「善は急げで明日の午後どうかしら。私は明日午前中で終わるから」

「ぼくも午後選択授業がないので午前中で放課だ。先生は帰ってこないかな」

「わからないけどたぶん大丈夫でしょ。それにもし先生と鉢合わせしたら、開き直ってあの梗概について問いつめるのよ」

マーヤはやっぱり度胸がある。ぼくは何度も感心しながら、そういうことを思いつかない自分が情けなくなった。

始業時間が近づいていた。登校生徒がぞろぞろ歩いて来る。ぼくはそこでマーヤと別れた。

[6]

翌日午後一時、学校を出るとぼくらは違うルートでF駅に向かった。駅でも知らないふりをしてH駅を降りたところでやっと合流した。駅近くのY野屋で牛丼を食べた後、歩いてT荘に向かった。

マーヤが案内してくれるのでT荘には迷わず着けた。二階建ての建物でかなり年数が経っている感じだ。昼下がりだからか辺りはしーんとしている。

表札はなかったけれど、先生の部屋は一階の一号室だと言う。マーヤはまるで自分の部屋のような手つきで、郵便受けの裏から鍵を取り出した。さすが演技派と感心した。鍵は粘着テープで貼ってあった。

「あとでくつつくかな。ばれるんじゃない？」ぼくは声をひそめて言った。

「大丈夫。同じ粘着テープ持ってきたから」マーヤも小声で答えた。さすが……。

ぼくらは辺りに誰もいないことを確認して部屋に入った。

入ってすぐが三畳ほどの台所。流しがあるだけで食器棚、食器類、ガス器具はない。冷蔵庫などの電気製品もなかった。

次の間が六畳の部屋で向こうも六畳。右に押入があった。突き当たりは全面窓だが、雨戸を閉めているので外は見えない。天井灯さえないけれど、台所側に窓があるので部屋はさほど暗くなかった。

マーヤの言った通り、部屋はがらんとして生活用具が一切ない。ただ妙なことに(昨日マーヤは言わなかったけれど)奥の部屋の隅にユーフォーキャッチャーの

人形が四つか五つあった。先生の趣味なんだろうか。

そして、二部屋の真ん中辺りの机にパソコンが一台載っている。机の前にイスが一脚。物はそれだけだった。ぼくは押入も開けてみた。そこもがらんだ。

先生の部屋は一言で言えば、引っ越しが終わってあと少しだけ物が残っている。そんな感じで生活臭が全くなかった。

デスクトップのパソコンは「いわくありげな」と言いたいところだが、何でもないごく普通の日本製パソコンだった。パソコンはインターネットとわかる画面を映し出している。パソコンから伸びたコードが壁の電話回線と繋がっている。もしかしたら一日中、それも24時間インターネットと接続しているのかもしれない。

ぼくはイスに座ってパソコンの画面を見た。マーヤが右の肩越しにのぞき込む。ぼくはちょっと鼻高な気分だ。早速マウスを右手に持って回してみる。マウスポインタはしっかり動く。

目の前の画面には表題と人数カウントの小窓があった。普通はこの周辺にいろいろ「飾り」が施されている。だが一ページ目はこの二つしかない。ホームページとしては味もそっけもないってやつだ。

表題は四倍角のゴシック体で「ワンエイトナインの集い」とある。

「何だろ。ワンエイトナインで……一八九？」

マーヤは答えない。たぶん首を傾げて考えるポーズだろう。

「これは間違いなく堺羽根先生製作のホームページだと思う。ぼくは作ったことがないので仕組みはよく知らないけど、ほら、ここの(ぼくは画面上のアクセスカウントの小窓を示した)数字が刻々と変わっているだろ。日本、いや世界中からこのホームページに接続した人の数が記されているんだ。すごいね、もう九十万人台だよ」

マーヤはぼくの説明を黙って聞いている。ぼくは周囲の状況を忘れてホームページにのめりこんだ。

マウスを下にスクロールすると次のページが現れた。そこに内容があった。各項目に分かれ、ずらりと説明文が書かれている。

ぼくはマウスから手を離して小見出し下の項目を読もうとした。そのときマーヤが突然マウスに手をのばして画面右上の[×]をクリックした。

ホームページはふっと消え、プロバイダーの画面になった。どこかのプロバイダーの画面のようだ。見たことのないプロバイダーだった。

「あ、何するんだよマーヤ。まだ内容を読んでいないのに……」

ぼくはそう言いながら、同時に金縛りにあったかのような恐怖を感じた。

事実ぼくは固まってしまった。

部屋にはマーヤとぼくの二人しかいないから、それはてっきりマーヤがやったことだと思った。だが、マウスに伸びたそれはマーヤの手ではなかった。

白くてふくらみを持った細い管のような、棒のようなもの。ぎざぎざのついた管の先に、刃物に似た鋭利な鎌がついている！

何とそれは真っ白なカマキリの手だった。ぼくの右肩の上には特徴的な細長いカマキリの顔があり、やや飛び出た目は右手(?)をマウスに添えたまま画面を見つめていた。

ぼくは飛び跳ねるようにイスから離れた。部屋の隅へ猛ダッシュで走った。

まさか……。そのまさかだった。壁から振り返って二つの部屋と台所を見回した。部屋にいたはずの、マーヤがいない！

ぼくの目はそいつに釘付けになった。そいつは視線を(見えているとすればだが)画面に向けたまま、手もマウスに添えたまま、まだ次の動きを始めない。

カマキリは全身白く蘭の花びらのようなひらひらを持っている。ビデオで見た花びらカマキリと全く同じだ。間違いなく花びらカマキリだ。小さくても不気味なのに、そのカマキリは等身大ときてる。まさか、マーヤが花びらカマキリに変身……？

ぼくが壁を背にじっとしていると、カマキリは首をぐりと回転させてぼくを見た。その目は一瞬青く光ったように見えた。そして、右手をだらりと下ろして直立した。全体的に動きはスローだ。

直立したままぼくをじっと見るそいつの姿はカマキリと言うより人間的な姿勢だった。足下のあたりにはマーヤの着衣が落ちている。制服の上着と白いシャツ。紺のスカートの下にちらりと見える白いもの。もしかしたらマーヤのパンティィ……？

「まさかマーヤ？ あの梗概どおりマーヤが花びらカマキリに変身したの？」

ぼくは小さく叫んだ。しかし、カマキリは答えない。

じりっじりっとぼくの方にやってくる。ぼくが壁を背に右に動けば右に、左に動くとカマキリも左に迫る。ぼくは次第に部屋の隅に追い込まれた。マーヤの変身って来年の一月じゃなかったのか。これは花びらカマキリなのか、それともマーヤなのか。

ぼくはマーヤの方に賭けた。

「マーヤどうしたの。ぼくだよ、はてなだ！ 幸二だよ！」

そのとき花びらカマキリはぼくのすぐ前で右手の鎌を斜めに振り上げた。そして「間髪を入れず」って感じで鎌を振り下ろした。

振り下ろす動作だけはものすごく早く、ぼくの目に入ってこなかった。その直後左の頬にかすかな痛みを感じた。左手で触ってみると血が滲むように噴き出して来る。切られた感覚がない！

その瞬間ほとんど偶然のように顔を引いた。それと鎌が振り下ろされるのが同時だったから頬のすり傷だけですんだようだ。顔を引いていなかったら、ざくつとやられたに違いない。ほとんどカミソリの切れ味だ。ぼくはぞっとした。

マーヤは、いや、この花びらカマキリはぼくを殺そうとしている。しかし、マーヤが変身したのなら、人間の、文芸部員の、ぼくの好きなマーヤの意識はないんだろうか。

ぼくは辺り構わず大声を出すことにした。

「マーヤ！！ 目を覚ませ。君は綾部摩耶だ！ 人間なんだ！ 変身なんかあるはずがない！ 人間に戻ってくれ！ ……ああ、夢なら覚めてほしい」

だが、花びらカマキリは動じない。そいつはもう一步踏み出した。ぼくはもう完全に鎌の射程圏だ。ぼくははずり落ちるように隅に座り込んだ。心の中で「誰か助けて」と叫んだ。

そのときだ。パソコンの画面から明るい雲のような光の塊が漂い出てきた。

そして、塊の端が花びらカマキリの足にかかった。鎌を振り上げようとしたカマキリは動きを止めた。光の雲は徐々に花びらカマキリの全身を覆い尽くす。

すると花びらカマキリは立ったまま両手を上げて左右に揺れ始めた。それはまるでカマキリの阿波踊りだ。ぼくは呆気にとられてその様子を見つめた。

時間にして約一分か二分。その後揺れるカマキリの白い体は溶けるように形が崩れ、やがて全体が白い粘土状になった。そして、見えない手が彫刻でもするかのように、上部のある部分はへこみ、ある部分は飛び出してくる。てっぺんは頭となり、鼻や目ができ、耳や口ができる。

そのうちそれは見慣れたマーヤの顔を形成し始めた。肩から腕が伸びて手が生える。同じように太股、膝、脚、足と形作られる。そして、ぼくはその胸のあたりが少しずつふくらみ始めるのも見るようになった。

その直後マーヤは全身が元に戻った。きりりとした顔。長い黒髪。柔らかく屹立した胸。くびれた胴、張りのある腰、下腹部の黒い髻り。すらりと伸びた足。それは光の中で神々しいまでに輝いていた。

ぼくは水の泡から生まれたというミロのビーナスを思った。しかも、それは心痛で痩せ細った最近のマーヤではなく、ちょっと前のふっくらとしたマーヤその人だった。マーヤは目を閉じて立っている。ぼくは素っ裸のマーヤから目をそらせなかった。

そして、光の雲はマーヤから離れた。マーヤはゆっくり畳に横たわり、うつ伏せになった。

光の雲は別の形となりつつあった。一分ほどで服を着た一人の男性が現れた。しかし、体全体が透き通ったかのようにぼんやりとしか見えない。足の辺りは形成されていない。これを一言で言うなら「幽霊」の感じだ。

やがてその人はじっとぼくを見た。ぼくは顔を見て後頭部を壁にぶつけた。穏やかな老人の顔。頬の皺と左頬のえくぼ。それは亡くなったはずの祖父その人だ。

……娘に服をかけてやりなさい。

優しい声で「祖父」は言った。だが、それは祖父の声ではない。そもそも口が動いていない。だが、声ははっきり聞こえた。

ぼくは慌てて制服や下着を集め、マーヤの体にかぶせた。
……そのうち目覚めよう。

ぼくはうなずいた。「祖父」は視線をマーヤからぼくに向けた。
 ……危ないところじゃった。すまなかったな。これはわたしたちの責任じゃ。お前に姿を見せるのは禁止されておるが、非常事態ゆえ仕方なかった。

ぼくは自然とひざまづいて見上げた。

「あなたは神なのですか。あるいは霊界の人？ あなたの姿はぼくの祖父そっくりなんですけど」

……いや、私は神ではない。四次元世界でお前の人生の骨格をつくる者。お前たちの言う神とは違う。また、四次元空間は霊界でもない。私がお前の祖父の姿に見えたとすれば、先ほどお前が救いを求めたとき、思い浮かべた人の姿だ。お前の心の反映なのじゃ。

わしの思念がお前の異常思念と重なったとき、三次元世界に到達することができる。どうやらインターネットの電波は思念の流れをつなぐようだ。わしの思念が間に合って良かった。しかし、人間は異常思念を一回しか放出できん。この方法は一回切りじゃ。

言ってることが全く理解できない。四次元世界、思念、異常思念……？

ただ「お前の人生の骨格をつくる」——それだけははっきり聞こえた。

自分が四次元世界の作者から作られていた。そんなことはSFの話に過ぎないと思っていた。それが事実だなんてぼくは今まで以上にショックだった。つまり、ぼくはやはりバーチャルな存在ってことか。

すると口に出さなかったのに、その人は答えた。

……いや違う。お前は実在しておる。時間がないので詳しく説明している余裕はないが、お前がバーチャルでないことだけは断言する。わしが作った梗概など所詮単なる梗概でしかない。

しかし、事態は急を要しておる。問題はサカイバネじゃ。こちらの科学者サカイバネが次元移動装置を発明した。次元の往来など絶対に不可能と思われてきた。お前たち三次元の者が二次元世界と行き来できないように、我ら四次元世界とお前達が住む三次元世界も完全に遮断されている。

ところが、インターネットの存在が次元移動装置を作りやすくしたのかもしれない。サカイバネは四次元世界のフロッピー、つまり人間の梗概を書き換えるという方法で、次元移動装置の機械を発明した。たまたま彼が使ったのがお前の梗概フロッピーということじゃ。

彼は現在指名手配中だがまだ捕まっていない。既にお前の世界に逃げていった可能性が高い。一体彼は何をたくらんでいるのか。現在われわれも次元移動装置を開発中だが、いまだ完成していない。このままではお前が危ない。

驚くべき話でにわかに信じがたい。しかし、目の前でマーヤの変身と再生を見た以上、信ぜざるを得なかった。それにしても四次元世界と言いながら、ワープロ、パソコン、フロッピーに指名手配だなんて、こっちと全く同じような世界じゃないか。

「じゃあ堺羽根先生がぼくを死なせる張本人なのですか」

……いや、堺羽根は関係ない。彼は初めサカイバネに操られていたが、現在では無関係なことが判明した。本物のサカイバネはお前の身近にいる他の人間に取り憑いているはずだ。だが、それが誰かはわからない。本来は堺羽根なんだが、何があったのか、サカイバネは人間の堺羽根を離れてしまった。次元のゆがみとひずみゆえかもしれぬ。わしが作成した「梗概1」と「梗概2」は一部時間経過がおかしい。

そうか。だから地獄物語は既に終わっていたのか。マーヤの変身も今起こったのか。

……おそらくそうじゃ。サカイバネが「梗概2」に施した改変は二つ。お前の死とその娘の変身じゃ。娘の変身はサカイバネのいたずらじゃろう。だが、お前の方の消滅は次元移動装置に関係しておる。その改変が装置を動かすパスワードの役目を持っているようだ。

「それじゃぼくはもっと長生きできるんですか」

……もちろんじゃ。もう時間がない。わしはやがて消える。「梗概2」でお前に刷り込まれた死の宣告とお前に関わった娘の変身を解除せねばならない。梗概フロッピーを探して改変された部分を削除すれば元に戻る。だが、フロッピーが見つからなければ、梗概は現実のものとなる。すまぬが我々には解決の手だてがない。三次元世界へ行くことはできぬし、思念を送り込む方法もめったに使えない。お前自身が独力でやるしかあるまい。何とか期限までに解決してほしい。

「待って。もう一つ教えてください」

ぼくは厚かましいと思ったが、聞けるだけ聞いておこうと思った。もちろんマーヤとのことだ。

「ぼくとマーヤの恋はどうなるんですか。片思いに終わるのですか。それともうまくいくんですか」

初めて「祖父」の姿をした人は微笑んだように見えた。

……それは決まっていない。お前次第じゃな。私はお前の人生の骨格を描くが、その細部は描かぬ。それをつくるのはお前自身じゃ。主人公は作者の思惑を越えて勝手に動くことがある。ゆえにお前はバーチャルではない、実在だと言ったのじゃ。

そうして、ぼんやりとした「祖父」は光の雲とともに消えた。

辺りは静かな薄暗い部屋に戻った。

ぼくは壁にもたれて座り込むと長い息を吐いた。今までのことは夢なのか現実なのか。左頬を触ってみた。鎌で切られた傷が痛い。縦五センチくらいのかすり傷だ。どうやら夢ではないようだ。

取りあえず花びらカマキリの鎌から逃れて命拾いできた。四次元世界の人の話は全然整理がつかない。ただ自分とマーヤが助かるためにはサカイバネを探し出し、梗概ファイルの「はてな消滅」と「マーヤ変身」を削除しなければならない。

それだけはわかった。身近の人でサカイバネに取り憑かれた人間て一体誰なんだろう？

そのときマーヤがうなりながら身体を動かした。目が覚めたようだ。

ぼくははっと思った。マーヤは花びらカマキリに変身してからの状況を覚えているだろうか。もし、覚えていなければ……。

案の定マーヤは半身を起こすと、ものすごい悲鳴を上げた。ぼくはまずいと思った。今の悲鳴は近くに聞こえやしなかったか。それにマーヤはやはり覚えていないようだ。いや、覚えていないこと自体、最もまずいことじゃないか。

「何で……どうして私裸なの？ あ、バカっ！ はてな目つぶって。あっち向いて」

マーヤは身体の下の白い物をぼくに投げつけた。ぼくの顔に当たったのはマーヤのブラジャーだった。ぼくはあわてて後ろを向いた。そして、壁に向かってひざまづいた。

「ごめん……でも言うておくけど、その件に関してぼくは全く無関係だからね。マーヤは覚えていないだろうけど、君は花びらカマキリに変身したんだ。ところが、四次元世界から誰かが現れて君を元に戻してくれたんだよ」

「何とんちんかんなこと言うてんの。とにかくこっち見たら絶交だかんね！ ほら、私のブラジャー、早くこっちに投げて」

マーヤは後ろでさがそし始めた。ぼくは後ろ向きにマーヤの白いブラジャーを放った。まったく、自分から投げておいて……。

それからぼくは思い出せる限り詳しく、マーヤが花びらカマキリに変身したこと、四次元世界の人が語ったことを話した。カマキリがぼくを殺そうとしたところは話さなかった。それとマーヤが元の身体に戻るところも一言で済ませた。

「私の裸じいっと見てたんじゃないでしょうね。ホントいやらしいんだから……はい、もうこっち向いてもいいよ」

マーヤはしつこい。ぼくはマーヤに向き直って強い口調で言った。

「そんなことないって。ホント神に誓ってちらっとしか見ていません」

マーヤは口をとがらしてまた何か言おうとした。そのときぼくの頬の傷に気付いたようだ。

「どうしたの、その傷！」

ぼくは手で撫でた。押さえるとまだ少し血がにじみ出る。

マーヤはぼくに近づくと花柄模様のハンカチを出した。そして、吹き出た血をかいがいしく拭いてくれた。甘い香りの中でちょっと汗くさい匂いもした。

それからマーヤは少し離れて言った。

「持っていていい……もしかしたら私が変身した花びらカマキリにやられたの？」

そうだったらごめんなさい。私には全然記憶がないわ」

「いや、大したことない。単なるかすり傷さ」

ぼくはそのことを肯定も否定もしなかった。

「それより、これでいよいよあの梗概は本物ということになった……」

ぼくは言った後で背筋が寒くなった。マーヤもすぐ気づいた。

「そうね。私が本当に変身したのなら、今度ははてなの番じゃない。次元のひずみとかいうことで、時間的にいつ起こるかわからなくなったんでしょ」

「そうなんだ。ぼくは今後F交差点だけは渡らないようにしよう。ところで、そろそろこの部屋を出ないか。先生が戻ってきたらまずい」

腕時計を見るともう四時近かった。

「そうね。堺羽根先生が無関係になったと言っても、彼が帰ってきて私たちがいたら驚くでしょうし。取りあえず出ようか。でも、ここ本当に先生の部屋なのかしら」

「ぼくも何だか妙だと思ってる。ここってもしかしたらサカイバネのアジトだったのかもしれない。先生はサカイバネと無関係だとわかったので、明日にでも本当にここが先生の部屋なのか聞いて見よう。それに今後のことも相談した方がいいと思うんだ」

「そうね、そうしましょ。じゃ早く帰ろ。私、何だかすごく元気が出てきた。まるで生まれ変わったみたいにすがすがしいの。変身したせいかしら」

マーヤがいい笑みを見せる。やっぱりマーヤは色々塗りたいくより素のままが一番美しい。ぼくはそう思ったが、口には出さず別のことを言った。

「今日家に帰って鏡を見たら、たぶんびっくりすると思うよ。十日前のマーヤの姿に戻っているから。そうだ、ちょっと待って。その前にこのパソコンで一つだけ確認したいことがあるんだ」

ぼくはそう言ってまたパソコンの前に座った。マーヤは左肩からのぞき込む。

まさか、また花びらカマキリに変身したりしないだろうな……？

パソコンの画面は消えていた。ぼくはスイッチを押して「Win97」を立ち上げ、インターネットと接続した。「ヤフー」の見慣れた画面が出てきた。それからいろいろやってみたが、さっきのプロバイダーの画面が見つからない。何度検索しても「ワンエイトナインの集い」と接続できなかった。

「おかしいなあ……どうして出てこないんだろう」

「何やってんの。早く、もう行こう」

マーヤが入り口に向かいながら急かした。仕方ない、帰ってから自分のパソコンでやってみよう。そう思って電源を切るとぼくもマーヤに続いた。

外に出ても付近はしーんとしていた。先生の部屋でぎゃあぎゃあ騒いだり、悲鳴を上げていたのに人影が全くない。このアパートには人が住んでいないのだろうかと思った。マーヤは粘着テープを使って郵便受けの裏に鍵を貼り付けた。ちょっともたついたのでぼくは焦った。それでも人は通らなかった。

H駅に向かって歩きながら、ぼくはさっきパソコンでやっていたことをマーヤに説明した。たぶん、サカイバネのたくらみは「ワンエイトナインの集い」に関係がある。既に九十万件もの接続があるのだから、きっとインターネットから探

し出せるはず。そして、今後はぼくらの身近にいる、サカイバネに取り憑かれた人間を探し出す必要がある——ぼくはそんなことを語った。マーヤも同感だった。

ぼくらはH駅に戻り、電車の中でもいろいろ相談した。五時前だったが、外はかなり暗くなっていた。

[7]

翌日放課後ぼくとマーヤは「三人だけで話したい」と堺羽根先生に申し出た。

先生は普段使わない第三会議室へぼくらを連れていった。第三会議室は校舎の一番端にある。クラス数減でできた空き教室を改造して会議室にしたらしい。職員室から遠いのであまり使われないとのことだ。隣は二教室続きの選択教室だから放課後は誰もいなかった。窓から見える木々の葉がかなり枯れている。しかし、葉っぱはまだまだ風に抵抗していた。

ぼくの頬の傷にはバンドエイドを貼っておいた。先生がどうしたと聞くので、「ちょっとマーヤにひっかかれました」と答えた。マーヤが頬をふくらませてにらんだ。先生は「おやおや」と言った。

ぼくとマーヤは並んで先生の前に座ると、今までのことを詳しく話し始めた。「梗概1・2」のプリントももちろん見せた。先生は驚きの連続だった(ように見えた)。

時たま質問したり、ちゃちゃを入れるので説明はしばしば中断した。笑いもあったりして信じているのか、疑わしくもじれったくもあった。「えっ、私が四次元の人間に操られていたって?」とか、「文芸部誌が教育長賞を獲る」のところでは「ほんとに? 何だ予言の話か。もちろんそんなことはまだ決まっていないよ。しかし、そうなるとうれしいがなあ」などと暢気な歓声をもらす。

ぼくにとっては「梗概」がますます現実味を帯びることになるので、実のところ賞を取ったとしてもうれしさ半分だ。そして、マーヤの花びらカマキリへの変身と再生、それに四次元関係の話になると、ほとんど信じていない感じだ。「やせ細ったマーヤが元に戻ったでしょ。それが証拠です」と言っても、先生はやせたマーヤを見ていなかった。

全て聞き終わると、堺羽根先生は「うー——ん」と長いため息をもらした。

それから黙ったまま時間にして五分は考えていただろうか。ぼくもマーヤもいらついたけれど、先生が話し出すのを待つしかなかった。

先生はもう一度長——いため息をもらすとやっと話し始めた。

「一言で言うと、とても信じがたい。文芸部員の君たち二人がぐるになって私をだまそうとしているか、というよりむしろ、うまくできた小説の原案を話に來たとしか思えない」

いきり立つぼくとマーヤを、先生は「まあまあ」といった感じで押さえた。

「しかし、君らは私と三人で広島まで行った仲だ。君らがそんなたちの悪いいたずら話を私にするとは思えない。それにぼくにもわかる不可解な点がひとつある。君たちはぼくが住んでいたアパートに行ったようだが、ぼくはもうあそこを引っ越したんだ。だから、あそこは今空き家のはずだ。第一あそこら一帯はH地区再開発事業のため、ほとんどの建物が来年には取り壊される予定だ。だから、あのアパートにはもう誰も入っていないと思う」

「やっぱり……」

ぼくは呟いた。マーヤもうなずいた。どおりで古くさいアパートだった。あれほどわめいて騒いだのに、誰も出てこなかったわけだ。

「じゃあ、あそこがサカイバネのアジトだったんだ」

「たぶんそうよ」マーヤも同意した。

先生は続けた。

「だから、ぼくは明日にでもあそこへ行ってみよう。自分の前の部屋だしね。君らよりは自然に入れる。もっとも呼び止める者はいないだろうが。それで部屋の中が君たちの言うとおりであったら、この話はまず間違いないと信じることができる」

「でも、サカイバネはもうあの部屋を引き払ったんじゃないかしら」

マーヤが言った。ぼくもうなずいた。

「そうだな。その可能性はあるが、私の勘では引き払っていないのではないかと思う。はてなの見た花びらカマキリはマーヤに戻ってそのまま消えてしまったんだろ。四次元世界の人の話だと、サカイバネは私たち三人以外の誰かに乗り移ったらしいじゃないか。だから、その人物がこの世界で動き始めない限り、あそこはそのままだじゃないだろうか」

ぼくはなるほどと思った。「で……？」と先をうながした。

「その後のことは私が見てからにしないか。はてなは特に時間がないと焦っているだろうが、私はそこを確認してみたいし、君の言う『ワンエイトナインの集い』のことも気になる。『ワンエイトナインの集い』って一体何なのか。その謎を早く解明する必要がある。

私は『ノストラダムスの予言』など信じていないが、来年はノストラダムスの言う人類滅亡の年にあたる。関係があるとは思えないが、何かひっかかるよね。とにかくネットで調べてみたいし、その他君たちが言ったことを調べたり考えたりする時間がある。だから、明日までこの話はひとまず中断ということにしてほしいんだ」

先生にそこまで言われては反対のしようがなかった。明日放課後もう一度ここに集まることにして、ぼくらは堺羽根先生と別れた。

ぼくとマーヤは久しぶりにワープロ室に行って遠井や木之元らと話を交わした。

他の部員は「花びらカマキリ」の変身譚をいかに作るかで苦しんでいた。ぼくは自分の体験を話したくてじりじりした。あるいはと思って「ワンエイトナインの集い」について聞いてみた。だが、誰も知らなかった。

その後みんなで「ワンエイトナイン」のことをあれこれ推理した。やはり、ちっとも思いつかない。そのときぼくはふっと思った。もしかしたら文芸部員の中に、サカイバネに取り憑かれた者がいるかもしれないと。背中がぶるっときた。

帰宅後ぼくは部屋に閉じこもってインターネットを開きまくった。どうしてもぼくが見たプロバイダーが出てこない。「ワンエイトナインの集い」の方はワンとかエイトとかナインは出てくる。だが、三つ重なった関係文書は全くなかった。

とうとうのん子に電話した。事情は言わずに「重大事だから調べてほしい」と頼み込んだ。

一時間位して返事が来た。「そんなものないよ！」だった。夜遅く帰ってきた父さんに聞いても当然のように知らなかった。

翌朝一時限が終わったところで、ぼくは堺羽根先生に緊急呼び出しを受けた。先生は職員室を出て廊下の隅にぼくを連れていくと小声で言った。

「大変だ！ はてな！ 文芸部誌が教育長賞を獲った。ついさっき内々で電話があった。それから木之元の小説『鈴のある引き戸』はベスト3だ」

「えっ、ホントですか。木之元の小説がベストスリー？」

木之元の件は梗概になかった。全く別の話なんだろう。それにしてもさすが小説がうまい木之元だと感心した。同時にまたも梗概の記述が現実となったので、ぼくはぞっとした。脂汗が出る感じだった。

「うん。さすが木之元だ。教育長賞の件はまだ部員に話していない。それともう一つ。早い方がいいと思って昨夜T荘に行ってみた。明かりはついていなかったし、誰もいなかった。ただ、パソコンなど部屋の中は君たちの言った通りだ。ちょっとやばいな」

やっと先生もぼくらの話を信じる気持ちになったようだ。

ぼくは黙り込んだ。先生はさらに何か言おうとした。が、チャイムが鳴ったので、「また放課後」と言って職員室に戻った。ぼくはマーヤのクラスへ飛んでいって廊下の隅で今話をした。授業担当の先生から「いちゃいちゃしてないで早く教室に入れ」と叱られてしまった。まったく……。

放課後ぼくら三人はまた第三会議室に集合した。先生はちょっと遅れてきた。

文芸部員に教育長賞受賞を知らせたという。みんな喜んでいたらしい。

椅子に座ると堺羽根先生はすぐ口火を切った。

「もうマーヤも昨夜のことは聞いたね。時間がなかったので話さなかったが、私はあの部屋のパソコンを動かしてみた。懐中電灯を持って行ったんだが、入った当初、部屋はもちろん真っ暗だったし、パソコンも動いていなかった。しかし、電源を入れたら起動してはてなの言うプロバイダーになった。私もあんな画面は初めて見たよ。すぐに『ワンエイトナインの集い』に転換した。それを見て私は君らの話が真実だと思うようになった」

先生はまじめな顔だ。さすがに信じる気になったようだ。

ぼくはちょっと口をとがらして言った。

「ぼくら嘘なんかつきません。しかし、変だなあ。あの後家のパソコンで何度も接続を試みているのに、一度もそのホームページを開けないんです。のん子の家のパソコンでもそんなものないよって言ってたし。不思議だなあ」

「私も家に帰った後接続を試みたが、確かに出てこなかった。検索の登録をしていないのかもしれない。それにしても接続回数のカウントがのべ九十万人に達していた。膨大な数だ。あらゆるプロバイダーに検索登録していないと、そんな数にはならないと思うんだが……」

先生も首を傾げた。するとマーヤが聞いた。

「先生『ワンエイトナインの集い』って結局何だったんですか」

先生はちょっと黙った後で話し始めた。

「それが……全体を読んでみると大したことがない。と言うかなんと言うか、来年のある日一斉にインターネットを開こうというホームページなんだ」

「……？」ぼくもマーヤも意味不明。

「つまり、こういうことだ。来年一九九九年九月九日、地球標準時間九時九分九秒の時刻に、全世界で同時にインターネットを開こうと呼びかけていたんだ。一九九九年九月九日九時九分九秒って、一がひとつあって、九が八つあるだろ。だから一八九、『ワンエイトナインの集い』ということなんだそうだ」

マーヤが「なーんだ、そんなことか」と言った。ぼくもちょっと拍子抜けした。

それって子どもとか学生とか、一部マニアが喜びそうな「みんなで同時に何かをやる」類の企画ものだ。ちょっと前ラッキーセブンで平成七年七月七日とか、今年だと「平成十年十月十日午前十時に生まれた赤ちゃんです」なんてニュースもあった。ぼくはもっと異常な集まりかと思っていたのに……。

先生は続けた。

「三ページ目に世界各国が一覧表になっていた。どれか一国をダブルクリックすると、その国のページに進む。するとその国が有するありとあらゆる言語で、世界標準時間に対する時差が書かれてあった。それが緯度で言うものすごい小さい単位だ。

例えば、日本なら何県なんてレベルじゃなく、何県何郡何町や何村という単位でその時間が書かれてあった。だから、その時間になったら、本当に全世界で同時にインターネット接続のクリックがなされるかもしれない」

ぼくらはちょっと黙って考えた。「ワンエイトナインの集い」だけなら、単なる企画ものでしかない。みんなで同時にインターネットを開いたからってそれだけの話だ。だが、そこまで厳密に「同時」にこだわるのはちょっと異常ではないか。

特にそれを作ったのが四次元空間のサカイバネだとしたら、単純な同時企画と思えない。サカイバネのたくらみって一体何なのだろう……。

ぼくは自分の考えを話した。堺羽根先生はまた長いため息をついた。

「うーん、今のところはまだわからない。しかし、これがもしサカイバネのたくらみだとすると、はてなの死を预言する程度の個人的問題ではないだろうな。もっと大きな事柄というか、大事件を暗示しているかもしれない。ひっかるのは

昨日も言ったが、来年がノストラダムスの予言する一九九九年ということだ。有名な七の月に恐怖の大王が降りてきて、世界は滅亡するなどという馬鹿げた予言がなされた年だろ。それを信じる人が若者を中心にかなりいるというから驚きなんだ。テレビや雑誌などもそれを煽っているし……。

ノストラダムスの予言は七ではなく九という説もある。そうすると一九九九年九月九日、九時九分九秒という、八つ並びの九は何かひっかかるね……」

すると、マーヤが深刻な顔をして言った。

「先生『ワンエイトナインの集い』のことはわかりました。何か重大な事件になりそうな気がします。でも、その前にまずサカイバネを探し出さなければならぬと思うんです。それがはてなの、幸二君の死を防ぐことになるんですから」

ぼくは急に涙ぐみそうになった。マーヤはぼくのことを何より気遣ってくれている。そう思うとマーヤの言葉はすごく胸にしみた。

先生もうなづいた。

「そう。それでぼくも考えてみた。四次元世界の人はサカイバネがはてなの身近にいたと言ったんだろ。だから、君に関係した全ての人を書き出して一人一人検討してみるんだ」

先生は黒板の前に立った。確かに名案だ。

ぼくは指折り数えながら身近な人を一人一人挙げていった。先生が黒板に書き出す。

父と母、そして兄。父方母方とも祖父母はもういない。それで家族は終わり。

「父と母は離婚しました……」

先生は「そうか」と言っただけだった。

他に親戚としてののん子とおばさん。のん子のパパとはほとんど付き合いがなかったので除外した。それ以外はみな遠い親戚になる。これで親戚終わり。

学校ではまず文芸部。堺羽根先生、マーヤ。この二人にはすぐ二重線を引いた。

そして部長の遠井、木之元、カム、チョリエ、赤鳥、イカヤ、鉄善、総帥、風音、さやさやの十人。赤鳥がマーヤのペンネームだ。

クラスメートを思い浮かべようとしてぼくははたと詰まった。クラスには「身近」と呼べるほど親密に付き合う生徒はいなかった。他のクラスもそう。中学時代の友達も他校だと日々の付き合いはなかった。

「これだけです……ね」

ぼくは自分の交際範囲があまりに狭いので、ちょっと恥ずかしくなった。しかし、先生とマーヤは気にしていないようだ。

二人は黒板を見ながらいろいろ推理した。ぼくはもっぱら聞き役に回った。

まず大人は結局除外しようという結論になった。それから文芸部の中でも「身近」と考えたとき、あまり顔を出さない部員連中も除外していいだろうとなった。そんな感じで消していくと、残ったのは親戚で「のん子」。部員では部長の「遠井」と副部長の「木之元」。この三人になった。

先生は言った。

「この間の課題作から考えると、遠井は現実なのかバーチャルなのか、訳の分か

らない作品を書くし、木之元もタイムトラベルを書き損ねて空間移動か次元移動のような小説になっていた。私はのん子さんのことは詳しく知らないので何とも言えないが、部員の中ではこの二人が一番怪しいと思う」

するとマーヤが反論した。

「でも、先生。サカイバネが私から誰かに乗り移ったのは一昨日のことです。だから、それ以前にどんな作品を書いていたかはあまり関係ないと思います」

ぼくもそう思った。だが、身近ということではやはりその二人だ。のん子は関係ないような気がした。

先生はまた長いため息をもらす。

「そうかー……そうすると誰かなあ」

そのときぼくは堺羽根先生ってこんなため息の癖あったっけ、と思った。

そして、今何気なく言ったマーヤの一言が妙に気になり出した。サカイバネは二日前までマーヤに取り憑いていたのだろうか。じゃあ花びらカマキリがサカイバネなのか？ もしそうだとすると……。

先生は別方向の話を始めた。

「はてな、マーヤ。私は思うんだが、マーヤの変身とはてなの消滅が書かれていたという『梗概』フロッピー。それは今どこにあるんだろう」

「わかりません。『梗概1・2』は修学旅行の合評日に先生から返却してもらったぼくのフロッピーに入っていました。けど、そのファイルがいつの間にか消えてしまったんです。たぶんぼくのフロッピーはコピーで、パスワードを入れなかったから自然に消滅したんじゃないでしょうか。だから、本物はサカイバネが持っていると思います」

ぼくがそう言うと、先生はまた考えるそぶりになった。

「うーん、そうだなあ。その可能性はあるが……。しかし、私があ部屋でパソコンを立ち上げたとき、フロッピーは入っていなかった。花びらカマキリはマウスに触るくらいで、フロッピーなんかいじってなかったんだろ。そして、マーヤが再生すると、花びらカマキリは消えてしまった。もしかしたら霊のように、私たちの目に見えない形でサカイバネはマーヤから抜け出ていったのかもしれない。

そうすると彼は今誰かに取り憑いているとしても、『梗概』フロッピーは持っていないんじゃないだろうか。はてなが今持っている最初のフロッピーはその中に「梗概」が入っていて、たまたま何かの異変で三次元世界のパソコンでは読めないだけ……そうは考えられないだろうか」

その瞬間はと思った。心の中であることを思いついたが、それは口に出さず、先生の質問に答えるだけにした。

「そうですね。確かに二三度接続を試みただけで『梗概1・2』はないと、諦めましたから。もしかしたらぼくのフロッピーの中に『梗概』があるのかもしれない。そうか。あの部屋のパソコンで開いてみれば、『梗概』が出てくる可能性があるってことか」

堺羽根先生は「その通り」といった風に笑みを見せた。マーヤが顔を曇らせて猛反発した。

「何バカなこと言ってるのよ！ 可能性はあるけど、あの部屋にもう一度行けるわけじゃないじゃない。第一私がまた花びらカマキリに変身したり、誰か他の人に取り憑いた四次元のサカイバネが現れたらどうするのよ！

私、何だかあの部屋だから変身したんじゃないかって気がしてるの。あそこがサカイバネのアジトだったら、もしかしたらあの部屋全体が時限移動装置なのかもしれない。だから、私怖い」

先生も額に皺を寄せた。

「うん。マーヤの心配はもっともだ。それはすごく危険な試みかもしれない。しかし、四次元の人『梗概』から、マーヤの『変身』とはてなの『消滅』の箇所を削除しないと、それは現実となると言ったんだろ？

だとすると少しぐらい危険であっても、やってみる価値はある。と言うよりむしろやるべきだと思う。もちろん君たちだけでなく私も行こう。念のためにちょっとした武器を持っていく必要があるかもしれない。警察に頼むのがいいんだけど、信じてくれないだろう。はてなはどう思う？」

ぼくは少し考えた。確かに危険な試みだが、身近な人からサカイバネを探し出すより、もっと確実な方法のように思えた。それにぼくにはある予感というか計画が芽生えていた。

ぼくは言った。「先生やりましょう。危険かもしれないけど、身近な人からサカイバネを探し出すより確実な方法かもしれません。もしサカイバネが現れても当たって砕けろだ。待っていたってぼくなんか一月には死ぬ運命なんだもの」

マーヤが「はてな……」と言ってぼくを見つめた。

ぼくは見返してウィンクした。先生は気づかなかった。

「よし。じゃあできるだけ早いほうがいい。明日の放課後行こうか」

すると、マーヤが反対した。

「先生、サカイバネの可能性が高い人たちみんな生徒なんです。だから、行くんだったら、放課後より午後の授業の時間帯がいいんじゃないかしら。はてなと私が午前中で終わるとき、先生もお休み取れませんか？」

ほんとにマーヤは大胆な願いをする。しかし、それは名案だ。

先生は苦笑した。

「君には参るよ。二人共通の日っていつなんだ？」

ぼくらは三日後を告げた。

「そいつはたまたま都合がいい。私もその日は午前中で授業が終わる。二人のために休みを取ろう」

マーヤが「やった！」と歓声をあげた。

ぼくは「ありがとうございます」と礼を言った。

先生と別れてから、ぼくとマーヤはワープロ室に向かった。

途中ぼくはマーヤに「家に帰ったらあることをしてほしい」と頼んだ。マーヤ

は怪訝な顔をしたが、取りあえずやってみると答えた。

それからぼくらはワープロ室で仲間と「文芸部誌の教育長賞受賞」を喜び合った。ところが、みんな意外と冷静だった。参加校が十数校と少なかつたし、編集は堺羽根先生がほとんどやった、というのが理由のようだ。自分たちで作って賞を獲得した実感が湧かないと。それに「教育長賞」というのもイマイチぴんと来ないらしかった。ぼくは「でも参加校の中でトップだったんだから、やっぱりすごいよ」と言った。

その夜マーヤから電話があった。マーヤはやや興奮していた。

ぼくは自分の考えに確信を持った。そして、いよいよサカイバネと最後の対決だと思った。

[8]

三日後の昼下がり、ぼく、マーヤ、堺羽根先生の三人はT荘の前に立った。

辺りに人影は全くない。もうすぐ十二月だ。今日は太陽が雲に隠れ、昼間なのに薄暗い感じだ。ぼくは手ぶらだがマーヤはバッグを持っていた。先生は何と金属バットを持って来た。手元に赤い布が巻いてある。私服なのか初めて見る黒いジャンパーを着ていた。

先生がドアから中をうかがった。小さな声で「誰もいないようだ」と言う。

マーヤが郵便受けの裏から鍵を取り出した。ぼくらは先生を先頭に恐る恐る中へ入った。中はかなり暗い。先生が懐中電灯を取り出す。

照らし出された先にイスと机、その上にパソコンがあった。もちろん電源は入っていない。二つの部屋は先日のままだった。

先生はぼくに金属バット、マーヤに懐中電灯を預けてパソコンの前に座った。

電源を入れると「Win97」が立ち上がる。スタート画面からすぐにプロバイダー画面になり、さらに自動的に電話回線と繋がって「ワンエイトナインの集い」のホームページになった。

先生は言った。「私たちのパソコンではこれが開けないんだから、このパソはやっぱり四次元世界のパソコンなのかもしれないね。ただ、このプロバイダーは判明したよ。一部カルト的なマニアの会員制のプロバイダーらしい。そこを一次起点としてよく見かけるプロバイダーにどんどん枝分かれして行く。つまり、通常レベルでは『ワンエイトナインの集い』は別の名前で登録されていたんだ。ネズミ講のようなものだね。それぞれホームページの名前が違うので、いくら検索してもわからなかったわけだ。

昨日各国の同時企画的なホームページを探してわかった。たぶんこいつがネズミ講の親玉なんだろう。どおりで接続カウントが多いわけだ。ほら、もう百万人に達している。サカイバネは一体何をたくらんでいるのか。とにかくもう一度スタート画面に戻そう……よし、はてな。例のフロッピーを入れてごらん」

ぼくはバットをマーヤに渡し先生と入れ替わって椅子に座った。そして、ポケットから「文芸部提出FD 久保はてな」と書かれたフロッピーを取り出して本体に挿入した。エクスプローラーで「3・5インチFD」をダブルクリックする。

接続音の後小画面に三つのファイルが並ぶ。ぼくが打ち込んだ三回分の課題作だ。やはり「梗概1・2」は出てこない。

堺羽根先生はがっかりしたのか、ため息をもらした。

「うーん。やはり違うか。とすると本物は一体どこに行ったんだろうねえ」

ぼくはそのフロッピーを本体から抜くと、マーヤに言った。

「マーヤ、君の持っているフロッピーを出してくれないか。先生、ぼくの勘ではそれが本物の梗概フロッピーじゃないかと思うんです」

マーヤはバッグからフロッピーを取り出した。昨夜マーヤに探してもらったのはそれだ。マーヤのカバンの裏ポケットに入っていたそう。

それにも「文芸部提出FD 久保はてな」と書かれてある。印刷された文字だから、ぼくはすり替えられたことに気づけなかった。そして、マーヤはまさか自分が持っているなど思いもしないから、今までわからなかったのだ。

先生は頬をぴくりとさせた。

ぼくはそのフロッピーを本体に挿入すると、さっきと同じ手順でファイルを呼び出した。じれったいような接続音の後三つの課題作、一番下に「梗概1・2」が現れた。

「やった！ それが本物のフロッピーだったのね」マーヤが歓声をあげた。

「そうだよ！ 先生、ありました。これが『梗概1・2』です。開きます」

「そ、そうだな……」先生がちょっとどもった。

ぼくは構わず「梗概1・2」をダブルクリックした。またじれったいほどの接続音の後パスワードの画面が開いた。ぼくはすぐ「OK」ボタンを押した。これがあの時のフロッピーならパスワードは関係ないはずだ。

案の定例の梗概が画面いっぱい開いた。

梗概Ⅰ「ヒロシマへの道—さみしさ二人旅—」 サカイバネ

ぼくはすぐ下にスクロールした。

梗概Ⅱ 続編「はてな、遠い世界へ(仮題)」 サカイバネ

1998年10月～1999年1月31日

1 九月文化祭。冊子『百八煩惱』製作。十月北海道修学旅行。

はてなマーヤと偶然三度二人だけになる。トラピスチヌ修道院、函館山の夜景、富良野Pホテルの夜明け。はてなマーヤへの思いがつのる。

第十五回課題「修学旅行」。はてなマーヤとの三度の出会いを書く。

- 2 第十五回合評「修学旅行」。恥ずかしがるマーヤ、提出したことを後悔するはてな。マーヤに謝ろうとデートを申し込む。
 - 3 初めて二人だけのデート。横浜山下公園、人形館。横浜球場。謝るはてな。はてな祖父、父のことを語る。純粹、異和感、父母の離婚。
 - 4 第十六回課題「連作小説の完成」はてなとマーヤのシンクロ率高い。
 - 5 第十七回課題「変身譚—花びらカマキリ」創作に苦しむはてな。
翌年一月文化祭冊子「百八煩惱」県教育長賞受賞。喜ぶ部員達。マーヤ変身。
 - 6 一月三十一日「変身譚」の合評。はてな学校の帰路、国道 16 号線の交差点で車にはねられる。はてな消滅。次の課題は「地獄物語」。はてな死の世界へ。
 - 7 悲しむ部員達、はてなの葬式。(終)
-

ぼくはマウスポインターを5の「マーヤ変身」に持っていき、範囲指定してデリートキーを押した。「マーヤ変身」がぱっと消えた。

マーヤが「やった！」と叫んだ。

それから同様にして6の段から7の「はてなの葬式。(終)」までを素早く削除していった。

マーヤがもう一度「やった！ やった！」と小躍りして叫んだ。

そして、ぼくはキーを大急ぎで打ち始めた。削除した部分にある言葉を入れようと考えていたからだ。しかし、世の中そう甘くなかった。「マーヤが」と打ったところで、当のマーヤが金切り声をあげた。ぼくはすぐ立ち上がって振り返った。

マーヤが懐中電灯で照らした先には堺羽根先生が立っている。

だが、その顔は先生ではない。忘れもしない細長いキツネ目の顔。白塗りの花びらカマキリだ。ズボンははいてジャンパーを着たカマキリだ。

もう正体を現したか。ぼくはマーヤを背に少しずつ壁に下がった。マーヤが後ろからぼくに金属バットを渡す。たぶん役立たないだろうが……。

花びらカマキリは言った。「ふーん。あわてないところを見ると、どうやら私の正体に気づいていたようだね。なぜわかったのかな」

それは意外にも堺羽根先生の声だった。まだ身体全体が変身していないからだろうか。ぼくはバットを構えて用心しいしい答えた。

「あなたが妙なため息を何度もつくからですよ。振り返ってみると、マーヤもサカイバネに取り憑かれて以後、ときどきおかしい言動があった。三日前先生と話しているとき、ふっと思ったんだ。あの花びらカマキリがサカイバネの本体だとしたら、サカイバネはもう一度先生に取り憑くのではないかと。

サカイバネはこの世界にやって来ると、まず堺羽根先生に取り憑いた。そして、引っ越した後のこの部屋を自分のアジトとして使った。しかし、なぜかサカイバネは人間の堺羽根先生を離れてしまった。たぶん修学旅行の合評後先生が誤ってぼくに梗概フロッピーを渡したからでしょう。梗概フロッピーがなければ次元移

動装置が使えない。

そこであなたはマーヤに憑依先を変えたんだ。『梗概1・2』を見たぼくがきつとマーヤに相談すると思って。案の定ぼくは体育館の裏でマーヤにフロッピーを見せた。そのときあなたは催眠術のようにマーヤに命令していたんだ。同じ外見のフロッピーとすり替えるようにと」

マーヤが「うっそー！」と叫んだ。「全然覚えてない」

「仕方ないよマーヤ。君のせいじゃない。多重人格のように、サカイバネは普段心の隅に隠れていて君を操ったんだ。彼が表に出ているとき君は無意識と言うか、目隠し状態なんだ。だから何も覚えていないのさ。その後サカイバネのマーヤはぼくから梗概フロッピーを取り戻し、再びこの部屋を出入りした。ぼくとマーヤがこの部屋に来たとき、君はまるで自分の部屋でもあるかのように振る舞っていた。ぼくはうまい演技だと感心したけど、実はマーヤの身体はいつもの自分の部屋に来ていただけだったのさ」

「信じらんない……」

花びらカマキリは言った。

「そうだ。馬鹿な堺羽根のおかげで私は余計なことをしなければならなかった。

私は堺羽根からその娘に憑依先を変え、お前からフロッピーを取り戻した。改変された『梗概』を見たお前は危険な存在となる。だから、早めに始末しておこうと、この部屋へ誘い出したのだ。

しかし、予定外だったのは再生モードが起こったことだ。四次元の連中が非常手段を使うとはね。世界法第一条の規則を破ってまでお前の前に姿を現すとは思いませんでした。

この部屋でその娘から強制的に排除されたとき、私はその娘の中にいたときの記憶を失った。『梗概』フロッピーがどこにあるのか、わからなくなってしまったのだ。そこでもう一度この堺羽根に取り憑いて機会を待ったわけだ」

ぼくはマーヤを見ながら言った。

「マーヤ。だから、サカイバネはぼくが人間の堺羽根先生だと思っていたとき実は君に取り憑いていた。そして、マーヤから離れた後は再度堺羽根先生に取り憑いたんだ。四次元世界の人が堺羽根先生は関係ないと言ったもんだから、ぼくらはこのことサカイバネが取り憑いた先生に相談しに行った。でも、あのときまでは確かに関係なかったんだ。マーヤが再生した後で再度取り憑いたんだから。つまり、ぼくが相談していた相手はいつだってサカイバネが心の中にいたってことだ」

マーヤが呆然として言った。

「何てこと……ごめん、はてな。そんなことちっとも知らなかった。私には全く覚えがないわ」

「おそらくサカイバネの意識と君の意識は完全に分離していた。そして、サカイバネは君の全てを支配して操れたんだ。今堺羽根先生を操っているように……」

ぼくはバットを握り直して身構えた。一体どうやってこいつと戦えばいいのか。

すると、花びらカマキリのサカイバネはぼくらを無視するかのよう、ゆっくりパソコンに近づいた。立ったままマウスを操作してあるファイルをスタートさせた。そして、パソコンからぼくのフロッピーを抜くと、ジャンパーのポケットからフロッピーを一枚取り出した。本体に挿入する。

読み込みの接続音が聞こえてくる。まさか次元移動装置をスタートさせる別のフロッピーがあるのか……。

ぼくは叫んだ。「何だそれは。サカイバネ、お前のたくらみは何なんだ。『ワンエイトナインの集い』で何をしようとしているんだ？」

サカイバネはゆっくり顔を回すと言った。

「私が次元移動装置を起動するフロッピーを一枚しか持っていないと思ったか。こんなこともあろうかと、念のためもう一枚改変した梗概フロッピーを作っていたのさ。この堺羽根という男のな。

今からお前たちを次元移動の旅に連れて行ってやる。その間に私の計画を全て話してやるよ」

サカイバネはパソコンから離れて壁際まで下がった。

ぼくらはパソコンの前に行って画面を見つめた。

パソコンは盛んに読み込みの音を発している。そのうち画面上に黒い点が一つ浮き出た。それは横に伸びて直線となり、縦に伸びて正方形となる。さらに高さがついて立方体となると、立方体はぐるぐる回転を始めた。一定方向の回転ではなく無限大記号のように全くランダムな回転だった。

そして、回転は徐々に速くなり、次第に全体が球のように見えてきた。高速回転で回るコマが静止に見えるように、もうそれは静止した真球だった。

ぼくは金属バットを両手に握り直した。

するとサカイバネが口を開いた。

「それが次元移動装置の起動だ。バットで壊そうとしても無駄だよ、はてなくん。そのパソコン本体は超金属で作られているので、ちょっとやそっとの衝撃では破壊されない。それより二人とも私の話を聞きなさい。私が何をしようとしているか、聞かせてあげよう」

ぼくは振り上げたバットを下ろした。一体どうすれば次元移動装置を止められるのか。どうすればサカイバネをやっつけることができるのか……。

サカイバネは遠くを見るかのように語り始めた。

「私は四次元世界からこの三次元世界をずっと眺めてきた。そして、傲慢不遜なニンゲンたちをこの世界から追放することにしたのだ。私は三次元と四次元の狭間でゼロのゆがみを起こす。世界中のパソコンが連動してある台数が同時に作動したときそれは起こる。『ワンエイトナインの集い』とは今ひそかに進行している計画だ。

来年の一九九九年九月九日、地球標準時間九時九分九秒——ワンエイトナイン

の時刻、全世界で同時にインターネットを開こうと呼びかけている。

賛同者は既に数百万人。半年で数千万人となろう。来年九月九日その時刻にインターネットが繋がったとき、この次元移動装置と連動してニンゲンは全て異次元空間に追放される。この世界は人間以外の生き物たちの世界となる。百年も経たぬうちに地球の自然は回復されるだろう」

ぼくとマーヤは真っ青になった。信じがたい話だ。しかし、花びらカマキリの顔をした四次元世界の科学者が語る言葉だから間違いあるまい。

「何てことを！ ダメだよ。そんなことしちゃあ」ぼくは辛うじて言った。

「そうよ。何でそんなことするの。あなたに人類を滅ぼす権利があるの？」マーヤも叫んだ。

サカイバネは取り合わない。しかも話題を変えた。

「はてなにマーヤ。お前たちがすむこの星は何という？」

ぼくらはちょっと呆気にとられた。マーヤが「地球……」と答えた。

「そう。ところで、この太陽系には九つの惑星がある。はてな全部言っごらん」

何だかサカイバネの言葉の調子が変わって優しくなったような気がした。仕方なくぼくは「水金地火木土天海冥の九つ」と答えた。

「そうだ。その中で有機生命体が存在して文明がある惑星はどれだ」

「もちろん地球です。生物は他の惑星にいないと思います」

「そう。地球だけだ……地球、この美しい星。青くみずみずしく豊かな自然の中、有機生命体が生きている星……地球。」

お前たちは当然知らないが、広大な銀河系の中で有機生命体が存在する惑星は地球一個だけなのだ。信じられないかもしれないが。ほとんどコンマ数十けたの低い確率で、この星は有機生命体が生きる、稀有な惑星として存在している。

つまり、銀河系でただ一つの、美しい自然と水にあふれ、生き物が暮らす惑星なのだ。この星を滅ぼすわけにはいかない。しかし、ニンゲンは自らこの星を滅ぼそうとしている。今のままの文明速度では地球はあと百年で全ての有機生命体が滅んでしまう。元凶はニンゲンなのだ。人間以外の生き物は何も悪いことをしていない」

一瞬花びらカマキリの目が悲しそうに潤んでいるように見えた。

ぼくはドキリとした。マーヤも黙ってしまった。ぼくの頭の中には大気汚染、フロン、温暖化、オゾン破壊なんて言葉がどどっと思ひ浮かんだ。酸性雨、森林伐採、環境ホルモン。そして、弱肉強食で殺伐とした世の中。民族問題、戦争、原爆、核兵器……。人間以外の生き物は何も悪いことをしていない。元凶は人間というサカイバネの一言はぼくの心に刺さった。

「でも……でも、そんなこと、そんなことが許されるの？ いくら人間が悪いことをしているからって全ての人間が悪い人ばかりじゃない。いい人だっていると思う。いや、いるよ。地球が無茶苦茶にならないようがんばっている人もいる。そんな人も含めて全部追放するの？ 年取った人も赤ん坊も、つつましく正直に

暮らしている人も……みんな追放するの？」

サカイバネは動じない。

「そうだ。全てのニンゲンを追放する。かつて何人が警告を発したことだろう。もう遅い。失わなければニンゲンは気づかない。だが、失われた後では遅いんだ、はてな。これはニンゲンの種としての限界なのだ。進化した文明によってニンゲンだけが滅びるのならまだいい。だが、地球の自然と水と他の有機生命体を同時に滅ぼすわけにはいかない。彼らに罪はない。そう思わないか。現在の状況を作り出したのはニンゲンだ。だから、私はこの世界からニンゲンだけを追放することにしたんだ」

噛んで含めるように言う言葉は何だかサカイバネと言うより、堺羽根先生その人が語っているように思えた。ぼくもマーヤも言葉を失った。

パソコンの画面はだんだんすごいことになっている。先ほど一個だった球が徐々に数を増していた。球は数十個集まると、また一つの球になる。それがまた集まってさらに一つの球を生み出す。その速さはどんどん増していた。

ぼくはマーヤの手を強く握った。そして、言った。

「ダメだよ先生。人間だってきっと気づく。自分たちの過ちに気づく。だから、そんなことやっちゃダメだ！」

部屋全体が次第に明るく輝き始めた。四囲の壁が奇妙にゆがんでいる。もう、次元移動が始まったのか。

花びらカマキリのサカイバネは言った。

「お前たちは知りすぎた。一足先に次元の狭間に連れていこう。心配しなくていい。すぐに人類全体と会えるさ」

ぼくはその言葉を聞いてこいつはやはり先生ではないと思った。

ぼくはマーヤに言った。

「マーヤ！ 死んだおばあちゃんを思い浮かべるんだ。おばあちゃん、助けてって一生懸命念じるんだ」

「何なの？ なぜ？」 マーヤが聞いた。

「いいから早く。おばあちゃん助けて、と心の中で叫べ。死にたくなかったら」

ぼくはマーヤの手をぎゅっと握りしめた。

マーヤは目をつぶり歯を食いしばってしきりに念じ始めた。

サカイバネが動揺したように見えた。

次の瞬間パソコンの画面から光の雲が漂い出て花びらカマキリを覆い始めた。

やがて着衣の花びらカマキリがゆったりと阿波踊りをする。上着やズボンが滑り落ち、やがて全身花びらカマキリのサカイバネになった。そして、前と同じように白い粘土状の塊になる。だが、今回は堺羽根先生に戻るのではなく、その塊は二つに分離した。既に次元の狭間に来ているからか。

塊の一つから裸の堺羽根先生が形作られていく(ぼくは中年太りの先生の再生を描写したくない)。

そして、もう一体は白くぼんやりしたのっぺらぼうのような人として再生される。人体の形だが手も足も明確に形成されていなかった。髪の毛や眉など体毛もなく鼻が小さく浮き出し、目と口は穴が空いているだけ……。

それはまるで出来損ないの人形のように見えた。これがサカイバネの四次元空間の本体なのか。ユーフォーキャッチャーの人形に親近感を抱いたわけだ。

先生は全身が元に戻って床に倒れた。サカイバネの方は倒れない。ふくらんだ足ですっと立っている。

サカイバネを取り巻いていた光は近くでおばあさんの姿を形作る。

マーヤが目を見開いた。そして「おばあちゃん……」とつぶやいて涙ぐんだ。

おばあちゃんはサカイバネに言う。口は動いていない。

……止めなさい、サカイバネ。三次元世界の人間を追放してはいけない。

……フッ ナニヲイウ オマエラニハ ナニモデキヌ スデニ ジゲンノ ハザマダ。

それは水をくぐったような聞き取りにくい声だった。

おばあちゃんはなお暫くサカイバネを説得した。しかし、段々声が聞き取りにくくなり、最後に「や…め…な…さ…い」と言って消えた。マーヤが「おばあちゃん、行かないで!」と叫んだ。

その声で倒れていた堺羽根先生が目を覚ました。あわてて衣服を身につけ、パソコンの側にいるぼくらの方に駆けてきた。壁際のサカイバネは全く気にしていない。

部屋が奇妙な空気に包まれ始めた。金属バットがぐにゃりと曲がって溶けていく。壁や人形がゆがみ、それぞれを構成した色が原色となってどろどろ溶け始めた。しかし、熱は一切ない。まるで物質の原子構成のようだ。あらゆる物の中で元の形を保っているのは、ぼくらが身につけた衣服とパソコンだけだった。そして、部屋全体がさらに奇妙に曲がりくねった空間になる。

その中にぼく、マーヤ、堺羽根先生、そして、サカイバネがいた。

サカイバネはぼくらを見回して言った。

……オレハ オマエタチノ ココロノオクノ ガンボウヲ グタイカシテヤッタノサ ゼンジンルイヲ ショウキョスルシカナイ トイウノハ オマエタチ ジンルイノ ガンボウデモアル。

……コノケイカクヲシル ユイイツノニンゲン オマエタチ サンニンヲ ヒトマズサキニ イジゲンクウカンヘ ツレテイコウ オマエタチハ オレノケイカクノ サマタゲトナル シンパイスルナ スグニ スベテノニンゲンガ ヤッテクル ソレマデ マッテイロ。

「止めろ、サカイバネ!」

ぼくは不意をついてサカイバネに突進した。しかし、殴りかかった瞬間ぼくは弾き飛ばされ、反対の壁に激突した。ゆがんだ壁だから柔らかいと思ったのに、普通に堅かった。

ぼくは「ぐえっ」て感じの声をあげた。マーヤが走ってきて抱き起こす。

先生は震えているのか、パソコンの側から動こうとしない。先生戦ってくれよ、と思った。

サカイバネはぼくとマーヤを見ながら言った。

……ムダダ バカナコトヲスルナ モウスグ ツク。

「お願い、止めて！」マーヤが叫んだ。

その直後どろどろの原色と化した壁の一部が裂けるように開いた。

外に青空と土色の山が見える。地上一メートルくらいだ。

すぐに部屋全体が傾いてぼくらは裂け目から吐き出された。

マーヤが悲鳴を上げて落ちていき、ぼくも地面にたたきつけられた。ぼくは何とか起きあがってマーヤのそばに行った。

「大丈夫？ マーヤ」マーヤはうなずいた。

深い谷底。尖った山巔。そこは山の頂上のような。日本の山脈のように見えるし、スイスカネパールの山々にも見える。高地のはずなのに、息をするのはきつくなかった。堺羽根先生もぼくらの側にやって来た。

目の前四、五メートルの空間に油彩の渦のようなぐるぐる回る箱があった。箱は縦横十メートル程。ぼくらを吐き出した裂け目は徐々に小さくなる。

箱の裂けめからサカイバネがこっちを見ている。それは口がつり上がってぼくそ笑んでいるかのような。もうダメだ。どうしようもない！

ぼくらは箱を見つめるしかなかった。裂け目がふうっと閉じられ、箱はまた激しく回転を始めた。そして、徐々に小さくなりながら空を遠ざかってゆく。

「伏せろ！」堺羽根先生が叫んだ。

ぼくとマーヤは「？」の顔。

先生はもう一度「いいから伏せるんだ」と言ってぼくとマーヤの上に覆い被さった。

その瞬間、はるか彼方の空間で強烈な閃光と爆発音が起こった。

すぐに原子爆弾のようなキノコ雲が生まれ、それはみるみる空を昇っていく。

しかし、爆風や衝撃はやって来ない。

やがて一度膨れ上がったキノコ雲は空間内部に吸い込まれるように消えた。

映像の逆回転を見るかのような。そして、辺りは静寂を取り戻した。

[9]

先生が立ち上がった。ぼくとマーヤも立って辺りを見回した。

穏やかな陽光が付近を照らしている。空はぼくらが見慣れたいつもの空だった。

「何が起こったの？ ここはどこ？」マーヤが呟いた。

先生がほっと一息ついて話し始めた。

「これで大丈夫。たぶんサカイバネは死んだろう。次元移動装置は改変された『梗概』フロッピーをセットすることによって起動する。ところが、違うフロッピーを入れるとパソコンが受け付けず、異常を起こすらしい。

あの箱は原子の塊のようだった。たぶんそれで核融合が起こって次元移動装置は自爆したんだ。私は四次元世界から連絡を受けてそのことを知った。良かった。人類が他次元へ追放されることだけは阻止できた」

ぼくは不思議だった。

「先生どうしてそんなことができたんですか。だってサカイバネは先生の改変した『梗概』フロッピーを入れて次元移動装置を動かしたんですよ。いつ違うフロッピーに入れ替えたんです？」

すると先生はズボンのポケットからフロッピーを一枚取り出した。

「これが最初入っていたやつだ。はてながサカイバネに突進したとき、すきを見てぼくが持っていた普通のフロッピーと入れ替えたんだ」

さすが先生、と感心した。戦っていたんだ。

マーヤが首を傾げた。

「でも不思議。サカイバネはなぜそれを知らなかったのかしら」

そう言えばそうだ。サカイバネは堺羽根先生の心の中に取り憑いていたはずなのに。

「うん。ぼくはそれら全てをついさっき思い出した。一ヶ月ほど前ぼくがインターネットを開いていると、画面から淡い光のような物が出てきて亡くなった父の姿になった。そして、彼はぼくに告げたんだ。お前はやがてサカイバネに憑依されるだろう。おそらく次元移動装置に連れて行かれる。そのときは再生後この姿——画面に今日見たサカイバネの全体像が出てきた——を見たら、お前はズボンのポケットをさぐってフロッピーを取り出しなさい。そして、サカイバネのすきを見てパソコンのフロッピーと入れ替えるよう言っていた」

「そうか。四次元世界の人たちそんなことしてたんだ。でも、よくサカイバネに悟られなかったね」

「うん。その記憶はぼくの心の中で完全に封印されてしまったらしい。ぼくはその後そんなことすっかり忘れていたし……だから、サカイバネも気づかなかったんだ。で、さっきサカイバネの姿を見たときぼくはあっと思って全てを思い出した。ズボンのポケットをさぐると、なぜかフロッピーがあった。催眠術のように何かのキーワードでフロッピーをズボンに入れるよう暗示されていたのかもしれない。そこでぼくはすきを見てパソコンのフロッピーを入れ替えたって訳だ」

「そうだったんだ」ぼくとマーヤはやっと安心した。

「ただ……」先生は続けた。

「ただ？」ぼくは促した。マーヤは辛そうに先生を見ている。

二人ともその先は聞かなくてもわかる。

「うん。ぼくらは三次元世界へ戻れなくなってしまった……」

ぼくはマーヤと顔を見合わせた。マーヤは今にも泣き出しそうだ。

ぼくら三人だけが異次元世界に追放されたことになるのか。

「先生ぼくらどうなるんでしょう。この世界で生きていけるのか」

「わからない。とにかく山を下りよう。そして、食べ物があるかどうか探そうじゃないか。サカイバネは人類を異次元に追放するとは言ったが、全滅させるとは言わなかった。だから、ここにだって何らかの食料はあると思うんだ。

ここはたぶん疑似三次元の世界だと思う。四次元と三次元の狭間じゃないかな。だから、人間がいないだけで、その他のことは我々の世界とほぼ同じじゃないかと思う。

ここは間違いなくバーチャルの世界だな。四次元世界の科学者が次元移動装置を発明してくれれば、迎えに来てくれるかもしれない。人間の『梗概』を使って装置を作れることがわかったからね。今度は『梗概』を改変しないで作ってほしいもんだ。ただ、いつ完成するかはわからない……」

マーヤのまなじりから涙が一筋流れた。

ぼくはマーヤの手を握って言った。

「先生、あっちの三次元世界じゃぼくたち存在していないんですよ。ぼくら行方不明で死んだことになるのかしら」

「そうだな。私の前の部屋がどうなったか。燃え尽きたか、消滅したのか。部屋の状況が変わっていなければ、私たちが何をしていたか知る者はいない。あるいは家出とか行方不明として失踪にされるかもな」

涙ぐんでいたマーヤが言った。

「先生、私たち三人が抜けたら文芸部どうなるでしょうか」

ぼくはちょっとずっこけた。マーヤはやっぱり天真爛漫だ。

先生は苦笑した。

「そうだね。有力部員が抜けるのは痛いだろうが、私たちがいなくても彼らだけでやっていけるさ。部長の遠井や木之元がいるし、他の連中だって……」

そのとき先生はがくっと何かにつまずいた。ずっこけのタイミングが遅いよ、と言おうとしてぼくは驚いた。マーヤも下を見て小さく悲鳴をあげた。

「堺羽根先生！ 足が、足が……」

堺羽根先生の右足から靴と靴下が脱げ落ちている。そして、そこにあるべきはずの足がない。足首の辺りまで透明になって消えかかっている。ただ血は一滴も流れていない。それから左の靴も脱げ落ちると、先生は倒れそうになった。ぼくはあわてて先生を支えた。まるで紙のように重さがない。

先生は長い息を吐いた。

「先生、あなたは……」

しかし、先生は慌てなかった。先ほどのフロッピーを取り出すと、落ち着いた口調で言った。

「やはりこうなるか。仕方ないな。このフロッピーの中に入っている改変『梗概』

は私自身の運命らしい。きみらも知っている通り、次元移動装置を起動させるための改変とは誰か人間の『消滅』を入れることだ。たぶんこの中で私は『消滅』になっているんだろう。それを削除できるパソコンはもうない。だから、それは現実のものとなる。こんな形でこの世からおさらばするとは思わなかったな」

もう諦めたのか、先生は他人事のように言う。ぼくとマーヤは涙がぼろぼろ出てきた。

「先生、ダメだよ。行かないで。ぼくらを二人だけにしないで」

「先生、いや！ 消えるなんていやだ！」

先生は座り込み、やがて横になった、ぼくは先生を抱き起こした。先生のズボンの下部はもうぺしゃんこだ。左腕も半分なくなっている。

「先生、痛くない？」

「いや大丈夫。どこも痛くない。はてな、マーヤ。元気を出すんだぞ。私はもういい。もしかしたら人類滅亡を願った罰かな。親を捨てた報いでもあるか」

先生は寂しげに言った。

ぼくは自分の梗概の一節を思い出した。「梗概1」のところにあった、S先生の言葉——彼の孤独「さみしくないの？」「もう慣れた、それにこの報いはやがてやって来る、ぼくはそれに耐えなきゃならない。親捨てる報いでもあるし」——先生の人生にはどんなことがあったのか、聞けないままだ。

先生はさらに力を振り絞るように言った。

「……はてな……マーヤ。これで、この世界で人間は君たち二人だけになる。迎えが来るまでがんばるんだ。辛いことを言うが、もし迎えが来なかったとしても絶望してはいけない。そのときは君らがこの世界のアダムとイブになれば。そして、争わない、謙虚でつつましい子どもたちを育てるんだ」

マーヤがちょっと顔を赤くした。ぼくはマーヤさえよければアダムになりたいと思った。

先生の消滅はほとんど胸の辺りまで来た。

「これでお別れだ。最後に私が好きだった昔の歌を、君たちの門出として送る。がんばってくれ」

それから先生は歌い出した。

♪遠い世界に 旅に出ようか
それとも 赤い風船に乗って
雲の上を歩いてみようか
太陽の光で虹をつくった
お空の風をもらって帰って
暗い霧を吹き飛ばしたい♪

【「遠い世界に」 作詞作曲 西岡たかし】

先生の声は次第に小さくなり、聞き取りにくくなった。

ぼくとマーヤは先生の口に耳を近づけた。

かろうじてまた聞こえ始めた。

♪～

若い力を 体感じて
 みんなで歩こう 長い道だが
 一つの道を力の限り
 明日の世界を さがしに行こう ♪

堺羽根先生の声はどんどん小さく遠くなる。歌い終わったとき、顔全体が薄くなり、最後にふっと消えてしまった。

後には先生の身につけていた衣服だけが残った。

「先生っ！」

「先生っ！」

マーヤはしばらくの間、ぼくに抱きつくようにして泣いていた。

ぼくもマーヤを抱いて涙が出るに任せた。

時間にして一時間もそうしていただろうか。ぼくはマーヤを励まししながら先生のお墓を作った。小さな穴を掘り、先生の着衣を埋め、その上に石を積んだ。

その頃になるとマーヤはかなり回復していた。時折笑顔も見えた。

「マーヤ、君はさみしくないの？ お母さんと二度と会えないかもしれないのに」

「昔から一人のこと多かったし。お母さんともいつか離れなきゃならないし。それに私の勘だと四次元世界の人が助けに来てくれると思う。それまでの辛抱よ」

「いいよなあマーヤは楽観的で。でも、そうでも思わなきゃ、やってらんないよな」

ぼくは助けに来てくれるとしても、ぼくとマーヤが結ばれた後にしてほしいと勝手なことを思った。

「ところで、はてな。あなたサカイバネの部屋でパソコンの『梗概』に何か打とうとしていたでしょ。何て書くつもりだったのよ。マーヤが……って書いていたけど」

マーヤがにらむように言った。さすがマーヤ、勘が鋭い。

「いや、あの、その……」

ぼくは正直に話すことにした。

「マーヤがはてなを愛するようになる——って書こうと思ったんだ」

マーヤはあきれ顔になった。当然か……

「まったくあなたって人は。四次元空間の人が言ったんでしょ。梗概なんか梗概でしかない。細部を作るのはあなただって」

「でも、梗概に入れとけば絶対かなと思って……ごめん」

「ここにはあなたと私の二人しかいないんだから、嫌でもあなたと付き合うしかないじゃない。それに、そうじゃなくても私はあなたが好きよ」

「ほんと？ほんとに？」

マーヤは明るくうなずいた。
 ぼくは飛び上がって「やったー！」と叫んだ。
 「ただし……」
 「ただし？」
 「私のありのままを見つめてくれるって条件でね」
 ぼくはちょっとしよぼんときた。でも、言った。
 「うん。ぼくはマーヤのありのままを見つめる。ぼくの心の中でこしらえた勝手な像じゃなく、君自身を愛せるようにがんばる。きっとできると思う」
 マーヤは微笑んだ。ぼくは最高の笑顔だと思った。

ここは底なしの孤独世界だ。でも、マーヤといればきっと耐えることができる。それに二人だけなら、マーヤをマーヤその人として見つめることができるだろう。でも、やっぱり少しは理想化するかもな……。

それからぼくとマーヤは手をつないで、山また山の広大な世界を眺めた。山の向こうに浮かぶ太陽はどことなく優しい光のように感じた。

だが、これから食料もなく、道案内もなく、この険しい山を降りていかなければならない。降りることができたとしてその後どうなるのか、見当もつかない。

でも、マーヤと力を合わせて生きていこう。さっきの先生の歌じゃないけど、明日の世界をさがしに行くんだ、マーヤと二人で。ぼくはそう思った。

(完)

ラストの歌「遠い世界に」(作詞作曲：西岡たかし、五つの赤い風船)を聞いたことがない方のために以下のユーチューブ動画を紹介します。

1 「遠い世界に：五つの赤い風船」(動画・歌詞付き)

<https://www.youtube.com/watch?v=xx1UAaQ5deM>

(映画のエンドロール風動画が素晴らしい。まるで本作に基づいて作られたかのように地球や宇宙も登場。途中で出て来る十代の男女二人がはてなとマーのようにも……)

2 「遠い世界に～五つの赤い風船」

<https://www.youtube.com/watch?v=qpCrermGkAY>

(1968年原盤の音楽(レコードジャケット、動画・歌詞なし))

3 「遠い世界に」——御影祐[CPU SAN作曲集]より

<http://mikageyuu.flier.jp/music/best-midi/toisekai.html>

(御影祐編曲によるカラオケ風インストゥルメンタル)

